

---

# 幻魔と妖魔

ランチュウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻魔と妖魔

### 【Zコード】

Z6587H

### 【作者名】

ランチュウ

### 【あらすじ】

これは、幻魔と妖魔の長きにわたる激闘の記録を記したものである・・・様々な世界で色々やらかしている両族が戦つたらどちらが強いのか、これを見ればわかるかもしない！？

## 第1話・ねるねる争奪戦（前書き）

今作は妖魔と幻魔がメインになるため、悪魔は空氣です。最初、短編にしようかと思ったので、変な箇所がありますが、気にしないでください。鬼武者やクレイモアも出す予定です

## 第1話・ねるねる争奪戦

これは、デルタとマヤニが出合つ一日前の話……。ある妖魔と幻魔がねるねるをめぐつて争つていた。

妖魔と幻魔……。この二つの魔族は長年睨みあつていた。幻魔は昔々に鬼によつて滅ぼされたはずだつた……。

しかし、からうじて生き残つた幻魔は、ハンバー・ガーのおまけ作り、自宅警備員をという新たなライフスタイルを作り出した。

そこに現れたのが、西洋からやつて来た、人間を喰つことを止めた妖魔たちだつた……。

彼らは鰻を焼いて売つたり、歌舞伎や浮世絵をさうに発達させるなど、日本人の文化に花を咲かせた。

裏舞台でしか活躍出来なかつた幻魔は妖魔を怨んだ。そして、何かとぶつかりまくつてきた。今回見せるものは幻魔と妖魔のつまらない争いの一つである。

ゼプラス

「やめろ、ねるねるは貴様の口には合わぬ……」

デレイク

「喰つてみなきゃわからんぞよ……」

デレイクは触手でねるねるを引っ張る――

ゼプラス

「貴様、田玉に触手がついたような感じの……ベアードがゼルゲノンになった感じの……」

デレイク

「いいから、ねるねるをよこすぞよ」

デレイクはさらになるねるを引っ張る…！

ゼブラス

「私のねるねるが欲しければ、100万ドルよ」しゃがれ…。

デレイク

「100万ドルでどれくらいのまい棒が買えるぞよ？（笑）

すると、ゼブラスは計算機で計算し始めた！

ゼebraス

「1ドルを110円とする、100万ドルは一億一千万…。  
うまい棒は一本10円だから、1100万本は買えるぞ」

デレイク

「それはよかつたな！」

デレイクはゼebraスが脇に抱えていたねるねるを無理矢理引っ張つた！  
その時…！

ぱああ――――ん

デレイク

「ああああああああああああああ…！…！」

ねるねるのケースはぐちやぐちやに割れてしまった・・・！

ゼプラス

「お前・・・」

デレイク

「返品するから100万ドル返して」

ゼプラス

「純粹にふざけるな（笑）」

## 第1話・ねるねる争奪戦（後書き）

他の連載物と違つて、第9天魔王のメインキャラはほとんど出ないため、よくわからないキャラが出ることもありますが、“第9天魔王”的キャラ紹介で紹介していこうと思います（オリジナルキャラのみ）

## 第2話・ファービー改造（前書き）

ファービー改造とか、機械技術の競い合いかと思つたら・・・食べる話になつてゐる。ヘレンが襲つたり襲われたりするぞ！？

## 第2話・ファービー改造

妖魔は機械の改造を得意としていた。しかし、ある失態を犯した。・。

ある妖魔が人を串刺しにしている様を見た幻魔が、それを再現した機械を人間に造らせた（ミシン）。

それを知った妖魔は頭にきて、幻魔の造った弾道ミサイルをばらして、ゲーム機を作ったのに対して、幻魔はゲーム機を破壊し、そのプログラムで凶悪な無人兵器を作つたりと技術を競いあつていた。今回は、あるおもちゃの改造を日論む妖魔と、それを阻止しようとする幻魔の話である。

ゼプラス

「では、ファービーを改造するか・・・」

と、言つてゼプラスはファービーに手を出した。その時、ゼプラスはファービーと田を合わせてしまつた！！

ゼプラスはあまりの恐さに動けなくなつた！  
すると、脱クレイモア・ヘレンがやつてきた。

ヘレン

「おっ、こんな所に妖魔がいるよ？  
どうしたんだよ、そんな所でうずくまつて？」

すると、ゼプラスは震えながら言つた・・・。

ゼプラス

「なあ、お前・・・自分のこと人間だと思っているか？」

ヘレン

「当たり前だろー！あたし、人間だもの」

ゼブラス

「そ、うか・・・前田前田か。よかつたな。・・・だつたら、これを  
見てどう思ひ？」

ゼブラスはヘレンにファーバーを見せつけた！

○ ○

ヘレン

「は？」

○ ○

ヘレン

「・・・じええ。どうあることもできねえ・・・（涙）

ヘレンは怯えて泣き出したーー！

ゼブラス

「くわあ、じつすれば、二二つの目を見ないですむのだ？」

すみと、田の前に田が三つの幻魔が現れた！

ゼブラス

「お前はテレサーー！」

ミツメル

「天さんのことを言いたいのか？残念だが、俺は天津飯といつ！」馳走ではない。俺はヒヤツハーなモヒカン幻魔・ミツメルさ……」

ゼプラス

「ミツメル？ 確かに、このちみんな的な田だな」

ミツメル

「それよりよ、うまいそうな生き物持つてんじゃん！ 俺に食わせろよ」

ゼプラス

「！」これはダメだ……これは私が改造するんだからな

ミツメル

「なんだよ、おめーもギルテンスタンみてえなタイプか？」

ゼプラス

「多分、そうかもな！」

ミツメル

「そいつ、喰わせてくれねえなら、そこの牝狐喰つや？」

ゼプラス

「喰えば？」

ミツメルはそういわれるべく、牝狐ヘレンの尻にかぶりついた……

ヘレン

「こつてえ————なんだよ、この変態モヒカン野郎……！」

ミツメル

「ひえ――！助けてくれ――――！」

ミツメルがヘレンから逃げてる間、ゼブラスはファービーを近くにあつた箱に隠した！

ゼブラス

「これで一安心・・・」

見ると、変態丸が料理をやつていた。

ゼebraス

「何やつてんのお前、出るとこひ違ひじやんー！」

変態丸

「俺も一応妖魔だからな。しかし、わざきの光景、おもしろかつたぞ。俺もあの女の柔らかそうなお尻をかじりたかったなあ・・・」

ゼebraス

「お前は、ウンディーネかレイチャエルの尻でもかじつてなー！」

変態丸

「そいつ、可愛いの？」

ゼebraス

「いや、むしろ・・・“可愛がつてくれる”と毎ひ

変態丸

「ふーーーん、機会があつたら会つてみたいな～。それより、電子レンジのボタンを押してみよう」

「ふーーーん、機会があつたら会つてみたいな～。

それより、電子レンジのボタンを押してみよう」

ゼプラス

「あ？ これか？」

ゼプラスは電子レンジのボタンを押した・・・。  
よく見ると、中にファービーが入っていた！

ゼプラス

「しまった！！私はファービーを電子レンジの中に・・・！」

しかし、もう手遅れだった・・・。

ファービー

「発火ドウドウ」

びりりつ・・・バシユーーーーン！――！

電子レンジは爆発した！そして、ファービーのバラバラ死体が散らばった。

ゼプラスはファービーの破片を口に入れた・・・。

ゼプラス

「ポリポリポリ・・・。うん、うまいっ！」

テーレッテレーン

変態丸

「え？ うまいの？俺も喰つ

変態丸はファービーの破片を食べた！

変態丸

「うまい！毛皮のパリパリ感がたまらない！」

ゼプラス

「溶けかかった田玉もイケる……」

一人が何かを食べているのを見て、ヘレンとミツメルも興味本意で戻ってきた……。

ヘレン

「お前ら、何喰つてんの？」

ゼプラス

「ファービーだよ！お前も、喰う？」

ヘレン

「あ、あたしはそんな薄っぺらいプレートが入った肉なんか、喰いたくないよ！」

ミツメル

「俺は喰う！アヒヤッハ――！今夜はゴ馳走だ――――！」

三人は仲良くファービーを食べ始めた！ヘレンは気持ち悪くなつて、その場を離れた……。

ゼプラス

「こんどは肉詰めにしようつ――！」

変態丸

「その次はから揚げに……」

ミツメル

「その次の次は消毒して喰おうぜー。」

「これで解つたことは・・・妖魔も幻魔も仲良く食べ物を分け合えることだ！」

## 第2話・ファービー改造（後書き）

よこすは絶対に、おじしきうでも、ファービーを食べてはいけない  
！！！

### 第3話・へたれんぼう（前書き）

今回は妖魔の素朴な弱点がさらけ出されている。オチもありきたりな気もするけど・・・あれをパクつてしまつたが、大丈夫かな？あの傘ババアの顔より。

### 第3話・へたれんぼう

妖魔は戦闘能力に長けている。そのため、その血肉を体内に取り入れて、強化された人間も多い。

しかし、妖魔にも弱点というものはある。今回はその弱点をさらけ出した結果、とんでもない悲劇が生じた妖魔の話である。

ある日、妖魔ゲドウが早朝に散歩していると、ゴーガンダンテスと出会った。

ゴーガンダンテス

「拙者の名はゴーガンダンテス。幻魔界最強の剣士！――」

ゲドウ

「俺は妖魔界最強の剣士だ！――」(ド)「んど一緒に、バトルしようよ(ド)ナルドつぽく」

ゴーガンダンテス

「おう！場所は大阪城の公園。深夜零時にバトルだ！――」

すると、ゲドウは焦りだした・・・。

ゲドウ

「なあ・・・夜は迷惑にならないか？」

ゴーガンダンテス

「昼のほうが迷惑だ。観光客もいるんだしさ。まつ、決闘を楽しみにしてる」

ゴーガンダンテスはとつとと去ってしまった・・・  
ゲドウは震え出した！

ゲドウ

「夜とかヤバいじゃん。だつて・・・だつて・・・お化けでるじゃ  
――ん――」

ゲドウはへたれの三人を呼んで、相談した。

ユマ

「なんだよ、こんな朝っぱらから・・・。  
昨日はシンシアにこき使われてろくに眠れてないんだ」

ゲドウ

「こつちは真剣なんだ！！貴様・・・文句いつよしならば、命より  
も大切なあほ毛をちよん切るぞー？」

ユマ

「ひいいつーーごめんなさいい（涙）

変態丸

「で、相談つてなんだ？」

ゲドウ

「お前らは、お化け怖くない？」

モスマン

「お化け・・・？「ーん、人間のが怖くないか？」

ゲドウ

「人間なんか、すぐ倒せるから怖くない」

モスマン

「あの・・・。その倒された・・・殺された人間がお化けになるんだよ？」

ゲドウ

「はあ！？俺は知らぬ間にお化けを増やしていくのか・・・。もう人間殺せねえ――――！」

ユマ

「あのさ、なんでお化け怖いんだ？」

ゲドウ

「だつてよ、攻撃しても効かないんだぞ！？ヤバくないか？それに背後に回り込んでいたり、キモい顔で笑いながら実体化してたりしたら、口ワスのキワミだよ――！」

変態丸

「あのね、俺ね、ある人が見たつていう長い爪を持つ、四つん這いのハイジャンプ怪女をね、深夜零時の大坂城で見かけたよ。しかも、身長がチエ・ホンマンくらいあつたぞ！」

ゲドウ

「ああ――ぎやあああ――！」

ゲドウはひっくり返った――！――！――！――！――！――！――！

ユマ

「それ・・・何かの妖魔じゃないの？」

ガラテア

「すまん。それ、悪のりした私だ」

変態丸

「・・・アホな・・・」

深夜11時、ゲドウは道頓堀でうずくまつっていた・・・。

ゾルバ

「さつさと行けよ・・・」

ゲドウ

「無理だつて！…いつ幽霊が俺を襲つて来るか、わからねえ…！」

ガラテア

「だから、あの怪女の正体は私だと言つてるだろ」

ゲドウ

「正体のほうが怖いから！…」

すると、ガラテアはキレてゲドウをお姫様抱っこした！…！

ゲドウ

「いやあ――ん！…何するの――…？」

ガラテア

「お前を強制的に大阪城に連れていく」

ゲドウは大阪城に連れて行かれた。大阪城の公園に着いたものの、

「ゴーガンダンテスが見当たらない……」

ゲドウ

「せつせと倒して、帰りたいのに・・・なにやつてんだあにつけ」

公園を見渡すと、奥に傘をさしている女性がいた。

ゲドウ

「あの~、こじらで剣士を見かけませんでしたか？」

すると、その女性は振り返った！その顔は見るもおぞましい顔だった！！！

ゲドウ

ゲドウはまたぶつ倒れてしまつた！

## ジユジユドーマ

「あらあら、私のあまりの美しさにひっくり返っちゃった。ゴーガンダンテスは、スイカの食べ過ぎで腹を壊して、来れないみたいだ

۱۹۴

ジロジロ見て、立あつた。

後ろに控えていたへたれ三人衆が助けにきた！

二  
マ

「大丈夫か？」

# 變態丸

「大丈夫なわけないよな。あんなキモい顔、眞昼に見てもビビるわ」

モスマン

「ゴーガンダンテスを知っていたことは、奴も幻魔か。あれは危険すぎる。色んな意味で」

ゲドウは田を覚ました。

ゲードウ

ゲドウがうつろな目でふと木のほうを見ると、変態丸が見たという怪女がゴソゴソと、何かやっていた！

ケトウ  
ツツ  
ミツ  
フジニコボ

へたれ三人衆もその怪女に気づいたが、何ともなかつた……。

۲۱۴

「ガラテアさん、またやつてるよ」

## モスマン

## 變態丸

「ガラテア、正体バレてもなお、人を脅かしたいんだな（笑）」

すると、ユマのケータイがなつた。ユマはケータイに出た。

ユマ

「はー、もしもし。もひ、アツーーほモの話題は止めてください」

ガラテア

「何言つてゐんだお前、私だ。ガラテアだ。今、ミリアーズと飲み会をやつてるんだ。お前も事が済んだら、早く来い」

ガラテアは電話を切つた・・・。それを聞いた四人は顔から血の気がひいた・・・。

ゲドウ

「なあ、あそここいつのは・・・一体、誰なんだ?」

ユマ

「・・・やあ――す――!」

ユマが叫ぶと同時に一同は逃げ出した――

### 第3話・へたれんぱつ（後書き）

なんか、今までのシリーズの中で1番の良作な気がする。まあ、サザエさんやクレヨンしんちゃんみたいに、一話で終わる話ばかりだからかな？

## 第4話・ある実験（前書き）

幻魔が出ない、妖魔がメインになつていてる。あいつらが友情出演。  
そして、あのキャラにスキャンダラスな事実が！？

## 第4話・ある実験

ゾルバはある事を考えていた。妖魔ゲドウの心靈嫌いはビリにからないのかと・・・。

ゾルバ

「奴は、妖魔や幻魔は何ともないようだ」

変態丸

「でも、ジユジユドーマでめちゃくちゃ怖がってたよ?」

ゾルバ

「あれの場合は、顔がアレだから仕方ないのさ・・・」

そこで、ゾルバはてるてるに相談した。

てるてる

「奴の心靈に対する強度は、実験で見極めてみるか・・・?」

てるてるの出した案はこんなものだつた

- ・幼女を幽靈見立てたらどうなるか?
- ・気持ち悪いキャラを差し向けたら、幽靈じゃなくてもビリるのか?  
?(ジユジユドーマで確認されたが、念のため)
- ・女子だと思っていた奴が女装少年だと知つたら?
- ・コマが美人になつていたら、どんな反応する?

と、いった内容だった。

変態丸

「ほんと心靈じゃないじゃん。でも、1番と4番、下手するど3番に期待」

てるてる

「では、始めるか」

まずは幼女を幽霊に見立てる作戦だが、肝心の幼女が見当たらぬ！

てるてる

「幼女いないのかよ？」

変態丸

「（心の声：）こいつ口汚だな。俺もだけど）今のところ、幼女の妖魔はいないみたい」

すると、ゾルバが小さい娘を連れてきた！

ゾルバ

「デルタから拉致つてきた！…」

フォーミコラー

「実験終わつたら、ギャラくれるんだよね？せつねやつね！」

てるてる

「かわええの、最近の幼女は・・・」

ゾルバ

「見た目は可愛いけど、性格は可愛いしない」

すると、フォーミュラーはゾルバの後ろに回り込んで、包丁を突き立てた！

フォーミュラー

「今、頭にきてんだ。ムカつく発言しないでよ（笑）

変態丸

「怖い・・・」

さっそく、実験は始まつた！

ゲドウ

「あれ、こんなところに何で幼女が？」

フォーミュラー

「居て悪い？」

ゲドウ

「いや、 いてもいいけど・・・。君、 なんて名前なの？」

フォーミュラー

「あたし、お化け！！」

ゲドウ

「ふーん、お化け・・・。はつ、はあ、ええー？」

・ ゲドウは震えながらあとすわつした！すると、フォーミュラーは・・・

フォーミュラー

「あたしがお化け？？？違う。あたしは悪魔だ！！ふつふははははは！」

と、なぜか発言を撤回してしまった！

ゲドウ

「なんだよ、幽霊じゃないのかよ、よかつた～」

最初の実験は失敗してしまった！

フォーミコラー

「じめんなさい・・・。つい、ブロッコリーの真似をしちゃって・・・

・（涙目）

ゾルバ

「ブロッコリーじゃなくて、ブロッコリーっていいたいんじや・・・」

てるてる

「可愛いから、普通にギャラくれてやる」

フォーミコラー

「わーいーやつたーーーーー！」

ゾルバ

「第二の実験は、何を使って実験すんの？」

てるてる

「ケロニアアつていう植物宇宙人。実は作者の嫁」

ゾルバ

「そんなこと畢ひつもいから、ケロニアとゲドウを合わせぬぞ」

「ゲドウはケロニアと出合つたーすると、ゲドウはすぐにケロニアに危機感を覚えた！」

ケロニア

「握手しませんか？」

ゲドウ

「いやだーーお前の手なんか触つたら、自分の手が腐る……」

てるてる

「あいつ、見た目で判断しているようだな・・・」

ゲドウ

「てめえ、キモい。消えろよ」

するとケロニアは胸を押さえて倒れ込んだ！そして爆発した！！

ゲドウ

「けつ、臭い花火だ」

ゲドウが見た目で判断するような奴だと知ったゾルバはキレた！

ゾルバ

「盟友とて許せねえ！..」

ゾルバはゲドウに心靈動画を見せた！！

ゲドウ

「ひいい！！！こええ・・・・！！！わかつた！俺が悪かつた！－－これからは見た目だけでなく、性格でも判断するからあ－－！」

「うして、ゲドウの悪い癖を一つ直した！」

三番目の実験は女装少年が必要だつたが、あいにく妖魔に女装少年はいなかつた・・・・。

てるてる

「そういうや、妖魔つて・・・。幼女や女装少年はともかく、女性キヤラいなくね？ぶつちぎりの不細工すらいないとか・・・虚しいだろ？」

ゾルバ

「そういうつと思つて、オメガからデスを連れてきた！」

デス

「せつせと終わらせよつ・・・」

すると、フォーミュラーはデスに抱き着いた！

フォーミュラー

「お兄ちゃん・・・。逢いたかつたあーーーん（泣

デス

「フォーミュラー、見ない間に大きくなつたな・・・（涙

三年ぶりの兄妹の再会に、一同はしばらく実験のことは忘れてしまつたが・・・。

ゾルバ

「・・・早くやれよ」

と、いうわけで実験スタート!!!

デス

「始めてまして・・・。僕は・・・私は、デス・・・です」すると、  
ゲドウは淡々とした様子だった。

ゲドウ

「うんうん。そりがそりが。お前みたいな娘が女の子なわけないも  
んな」

デス

「え・・・?」

ゲドウ

「隣からお兄ちゃんって声が聞こえてきたから、まさかと思つたら、  
・・・」

実験は失敗してしまつた!

ゾルバ

「おい、実験・・・。すさん過ぎないか?」

てるてる

「そ、そんな」とはない・・・」

変態丸

「絶対に一番目以外のやつがやりたかっただけだろ・・・」

すると、コマが現れた！

その顔は、コマとは思えないほど美しかった！

コマ

「マイクに三時間かかった・・・」

変態丸

「わあ、まるでオーデリーみたい」

春田

「嘘さん、世界を春田色に染めませんか？」

ゾルバ

「はいはい、オーデリー違いね。うんうん」

春田

「くつー！」

春田には帰つてもうつて、わたくしく実験開始！

コマ

「ゲドウさん、私を見てじつ思っていますか？」

ゲドウ

「どう・・・って、いつもより綺麗だよ、失禁のオーデリー」

オーデリー

「わやーーーーーーーー（赤つ恥」

てるてる

「おおつ、恥ずかしい秘密をすばすかと叫びとせ・・・またこ外道だ！」

コマ

「私、コマなんですけど・・・」

すると、ゲドウは・・・

ゲドウ

「そんなケバいメイク顔のコマより、いつもの顔のコマのほうが俺は好きだな・・・」

てるてる

「な、なんだと・・・！？」

すると、コマがウキウキしながら帰ってきた！

コマ

「ゲドウさん・・・私に気があるんだ・・・」

てるてる

「いつもの顔のが好き・・・か。つまり、あいつはブスが好きなんだな。まあ、ジユジユドーマみたいなのはさすがにないと思つが・・・」

シンシア

「コマさん、妖魔に恋をするつてことは、もつ・・・（嘲笑）

コマ

「・・・（泣

ゾルバはゲドウから真相を聞いてみた・・・。

ゾルバ  
「お前、本気で好きなのか？」

ゲドウ

「あほ毛に惚れた・・・」

ゾルバ

「ぐだらなすゞぎて・・・、悲しそぞる」

実験の結果

- ・幼女を幽霊と見間違えることはない。
- ・見た目で判断する。
- ・男と女の見分けはつくらしい。
- ・コマに惚れてる（特にあほ毛に）

これで判ること・・・田は悪くなさうだが、女を見る田は田に  
近い。

#### 第4話・ある実験（後書き）

ユマの扱いは、ひどいのか、優遇しているのか・・・。ユマって、ニコアーズで一番弄られてるやつな・・・。

## 第5話・ミリアのストーカー（前書き）

あのミリアを狙う変態が一人現れる。このミリアはなぜか幻影を使わない。と、いうか使えなくなる。変態のまがまがしい妖気によつて・・・。そんな時に意外な人物が！？

## 第5話・ミリアのストーカー

妖魔も幻魔も恋をする。たとえ、種族が違つても守り抜こうという本能が働くやつもいるらしい。

今回はそんな変態に狙われてしまつた自称17歳の姉さんとその友達の話である。

ある日、ミリアはラグリアスに物申すために神聖ラグリー帝国にきていた。

ミリア

「人喰い妖魔を倒してもらひよつに頼んでみるか・・・」

この世界では、人の味方をする妖魔とミリアーズは仲が良いようだ。ミリアが城に入ると、なんか城の中が暑いと思つた・・・。

ミリア

「（心の声：おや？なんか暑いな・・・。前に来た時はクーラーきてたのに・・・）」

すると、廊下に妖魔皇帝・ラグリアスが倒れていた・・・。ミリアはすかさずラグリアスを起こした。

ミリア

「どうした、しつかりしろラグリアス！－！  
・・・まさか、組織にやられたのか？」

すると、ラグリアスはうつろな目で

ラグリアス

「ミリアに看病してもいいと、体温が上がる（興奮」

ミリア

「それは、どういたしまして。  
で、一体誰がやつたんだ！？」

ラグリアス

「オーバーヒート妖魔・シユーボーンだ……」

ミリア

「シユーボーン……？そいつは組織の刺客か！？」

ラグリアス

「違う……。我が軍で作り出した妖魔。熱い男を元に作り出した  
らしいが……。ウロヤズクがシユーボーンの胎児に直射日光を当  
てたらああなつたらしい。……アツー！」

ラグリアスが叫んだ。ミリアは背後からすさまじいが来るのを感じ  
て、振り向いた。

すると、メラメラに燃えている人型の妖魔がいた。

ミリア

「お前が城の室温を……つて、なんだその顔は……。  
なんでそんなにテカつている……！？！？」

すると、シユーボーンはいきなりキレた！

シユーボーン

「見た目で判断すんじゃね——よ——！」

ミコト

「……すみよ（苦笑）

ショーボーンはミコトの顔色を見て、何か悩みがあるのを察した。

ショーボーン

「どうしたんだ、顔色が悪いぞ。友達の悩みか？」

ミコト

「ああ……。今日は心の友のヒルダの命日なんだ」

ショーボーン

「そうだったのか。まあ、くよくよするなよ」

ミコト

「ああ……」

ショーボーン

「それより、お前は今日から、俺の嫁だ……」

ミコト

「? ? ? へ?」

ミコトは一瞬、何言われたか理解出来なかつた。

すると、ウロヤズクがやつて來た。クーリッショウを持つて……。

ラグリアス

「おおっ、私のために買ってきてくれたのかー！」

ウロヤズクはラグリアスを無視して、シユーゾーンにクーリッショ  
を飲ませた

「 シューゾーン  
「 ゴクッ・・・。 へああつゞ」

ショーゾーンはヘブン状態になつた！

「のびのび パラダイス……！」

すると、シュー・ゾーンの炎が消え、やつときよりマシな室温になつた。

「ウロヤズク……何という愚行を……」  
ラグリアス  
すると、ウロヤズクは焦つてこう言つた！

「変な女に脅されてやつてしまつたのです・・・」

「その次は一本つながり」

—その女は一体なんなんだ！？

ウロヤズク

「なんか、『ミリア隊長がここに来るから、シユーボーンを発動しろ』と言われ、なぜだと聞いたら、『暑くなれば、ミリア隊長は服を脱ぐはずだから、それを押みたい』と、すさまじい気迫で迫つてきたので……」

その女、たしかタバサと名乗つていた」

ミコア

「あいつ・・・。何企んでいる・・・？」

すると、シユーボーンはまた業火を放ちながら、キレた！

シユーボーン

「あんなアイスで俺を止められるわけねえだろ、ええ！？」

また、すさまじい室温に戻ってしまった！

シユーボーン

「ミコア、俺の子供産めよ-----！」

ミコア

「純粹に嫌だ」

シユーボーン

「恋のチャンスを、諦めんなよ！…そこで-----！」

ミコア

「私、イースレイカリガルドみたいな男が好みだから・・・」

シユーボーン

「好き嫌いすんじゃねーよ！..」

その時、いきなり城の室温が下がった！

シユーボーン

「寒い！」

ラグリアス

「うわっ！－－いきなり室温がかわったから、心臓がおかしくなったぞ・・・！？」

すると、玄関に青白い男が立っていた。

ヒエール

「暑苦しい奴は嫌われるぜ。私みたいにクールな男でなければミリアは幸せになれない」

ヒエールはそこから離れると、ミリアの目の前に瞬間移動した！

ラグリアス

「奴は、幻魔ヒエール・・・。南極の果てで眠っていた男・・・」

ヒエール

「ミコア、慎んで君のダーリンになろう」

すると、ヒエールはミリアの手にキスをした！

彼の唇のついた部分はなんと凍傷になつた！

ミコア

「（心の声：）こいつ、キモい。私のこと想つてるならまづ、触つてこないで・・・」

これを見たシユーボーンは、大激怒した！－－そして、ものすごく燃えだした！

シユーボーン

「てめえ、女心分かつてねえよー！」

ヒ  
エ  
ル

「お前だって、ミリアの身体を狙つてる癖によ・・・」

ショーソーン

「見た目で判断すんじゃねーよー！」

「あ、シジミ、

۸۷

「なにい！？」

たに

シユーザーンはシジミを探し始めた！  
すると、ヒエールはミリアの胸に向かつて手を伸ばした！（本性）

ヒエール

「揉ませう———！——！」

ミリア

「なつ！？」

ミリアは不意をつかれた！しかし、ラグリアスがヒエールの手をハントマーで破壊！！

ヒエール

「ぬわあ！！腕があ！！！」

## ラグリアス

「お前の、氷のような手で胸を触つても、柔らかさは・・・わかるまい？」

ヒエール

「おのれえ、妖魔皇帝め・・・。いつも人間の味方をしあつて・・・。そんなに、人間が大切か？」

ラグリアス

「人の心がない奴は・・・死んだらどうだ？」

すると、シユーネー・ゾーンがキレた！！

シユーネー・ゾーン

「シジミがトウルルつて頑張つたのに、全く取れねえ！！  
てめえがミリアのストーカーだからだ！！！」

すると、シユーネー・ゾーンはミリアの後ろに回つた！

そして、シユーネー・ゾーンはミリアのお尻に手を伸ばした！

ラグリアス

「おまえもか――――！」

ラグリアスは盾でシユーネー・ゾーンを押し出した！

シユーネー・ゾーンを遠ざけたが、盾はあつという間に溶けた！！

逃げる、ミリア！「こいつは俺が止める！！」

ラグリアスがそういうと同時に、ミリアは逃げ出した！

ラグリアス  
「くそつ、囮まれてしまったか・・・。

ラグリアスがそういうと同時に、ミリアは逃げ出した！

二人はミリアを追い掛けようとした。すると、ラグリアスが目の前に現れて叫んだ！

ラグリアス

「ミリアを愛しているなら、この俺を倒してからにしな……！」

シユーボーン

「熱くなれよ…………！」

ヒエール

「凍え死ね…………！」

ラグリアスは一人の技を喰らつた……！

ラグリアス

「ぬがあ…………！」

ラグリアスは体の体温が狂つて倒れた！

シユーボーン

「俺の嫁…………！」

ヒエール

「私のマイ・ワイフ…………！」

二人はミリアを追いかけ始めた！

一方、ミリアは奥の部屋にやって来た。ミリアはその部屋の中に入つた！

すると、予想だにしない人物と出会つた！

ミリア

「ヒル……ダ……？」

ヒルダ

「うん。私だよ。ヒルダだよ」

ミリア

「あの時、死んだはずじゃ……」

ヒルダ

「バイオテクノロジーで生き返ったんだよ。体温がいきなり上がったから、眠りから覚めたんだ」

すると、ミリアは泣きながらヒルダに抱き着いた。

ミリア

「嘘みたいだけど……。幻じゃない……。幽霊じゃない（涙）」

すると、あの二人がやつて來た！

ヒルダ

「ミリア……。あの時誓つたよね……。一桁ナンバーになつたら、共に戦おうと……」

ミリア

「ああ、そうだったな。これが初めての戦いだな」

ミリアは変態一人に迫られて、何もできなかつた。しかし、かつての心の友が現れてくれたおかげでいつもの自分を取り戻した！

ミコア

「さあ、死にたければこい！」

ミコアはそう叫んだ！

しかし、変態二人の目線はヒルダに集中していた！

変態二人

「ヒルダ可愛い！！俺の嫁だ！！！」

ヒルダ

「え？」

ミコア

「心変わり、早つ！！」

変態二人、こんどはヒルダを巡つて争い始めた！

シユーザーン

「氷系のお前がヒルダを幸せいに出来るとしても思つてんのかよーー？」

ヒエール

「ああ・・・」

シユーザーン

「何言つてんだ？」

ヒエール

「おっさんは売れ残り（ガラテア）と戯れてな！」

シユーボーン

「何だと——！？」

二人は喧嘩を始めた！

ミリアとヒルダはポカーンとしていた。  
すると、タバサが黒いボールを持ってきた！

タバサ

「ミリア隊長は誰にも渡さない！ヒルダはどうなってもいいけど

タバサは黒いボールを変態一人にぶつけた！すると、ボールが爆発  
し、喰らつた変態二人は戦闘不能になつた！

ミリア

「・・・」

何となく戦闘が終わり、ミリアは帰ることになつた・・・。

ミリア

「私は帰るが、ヒルダはどうする？」

ヒルダ

「私はラグリアスさんの介護をする。ラグリアスさんが回復したら、  
組織と一緒に倒そう」

ラグリアス

「ヒルダが介護してくれるなんて・・・。俺（興奮）

タバサ

「じゃあ、お世話になりました」

ミリアとタバサは帰った・・・。

帰ったあと、ラグリアスはかすれ声で「」と言った。

ラグリアス

「ミリアのストーカー・・・。まだ、いる・・・」

ヒルダ

「え？あの変態一人は逮捕されたし、もう・・・」

ラグリアス

「ミリアを付け狙う、真のストーカーは・・・タバサだつたんだ。  
あいつ・・・ミリアの尻や胸をジロジロ見ながらよだれ垂らしてた  
り、氷の反射を利用してスカートの中覗く」としていたぞ？」

すると、ヒルダは微笑みながら「」と言った！

ヒルダ

「ミリアは、私が見ない間に愛される人間になつたんだよ。きっと  
ミリアはいい部下に恵まれてるんだろうなあ」

ラグリアス

「うん、そうだな。心配する必要はないよな」

ラグリアスはすっかり安心してしまった・・・。

ラファエラとルシエラがトランスフォームして、ルシラファになつてしまつていてることを知らずに。

## 第5話・リリアのストーカー（後書き）

今回は今まで書いた小説で最も字数が長い・・・。そしてグダグダな展開。簡潔にシユーズーンとヒエールの恋のバトルにしつけようかつた。

## 第6話・6000字耐久レース（前書き）

突然、組織を壊滅！？しかし、リムトが倒せない。倒すには極端な条件が必要なようだ！内容はぐだぐだな残念会だが・・・突如、クレアの大切な人が、恥ずかしい服を着て現れる！――！――！

## 第6話・6000字耐久レース

ついに、組織の長・リムトを殺すことになつた妖魔軍団。深淵喰いやアリシア・ベスを難無く撃破し、幹部をぶつた切りまくり、ついにリムトの元についた！

リムト

「ここまで来たか、愚か者め」

ゾルバ

「我れら妖魔一族の恨み、ここで晴らす！」

ゾルバは切り掛かつた！

しかし、跳ね返つた！なんと、リムトの回りをバリアが覆つていた！

リムト

「私を倒したければ、6000字突破しろ。でないと私は倒せぬぞ

！」

ゾルバ

「くそあ・・・」

ゾルバは軍を率いて立ち去つた！

リムト

「代わりは何人もいる。部下も、戦士も・・・」

ゾルバ達は残念会を開いた・・・。

ゾルバ

「くそつ、あの血管浮き上がりじじいめ」

ゾルバはさうじつてコマの尻を蹴った！

コマ

「痛いっ！」

ヘレン

「まあ、組織のやつはあいつだけなんだから、氣長にこう

ヘレンは酔っ払ってるのか、ゼプラスを口説いてきた！

ヘレン

「おっさん、あたしを愛人にしてえん

ゼプラス

「黙れ牝狐。私には愛妻がいるんだ」

てるてる

「おらあ、もつビールの泡食えよ！」

バク

「もう、食べられませんよ・・・

ゲドウ

「コマ、俺とキスしろおーーー！（酔

コマ

「え？ ちよつと・・・うべーーー！」

てるてる

「あつ！コマとゲドウがチューしてるぞ！

ひゅーひゅー！」

シンシア

「所詮、ぐずのファーストキスはぐずなんですね！（嘲笑）

みんながドンチャン騒ぎしているなか、ミリアとクレアは冷静だつた！

ウロヤズク

「どんちゃん？たしか、ハム太郎にそんな犬いたな！」

デネヴ

「なにナレーションにツツ ハリを入れていいんだか・・・」

ミリア

「リムト・・・。最後の最後で、厄介な仕掛けを・・・」

クレア

「6000字がどうのこいつの言つていたが・・・。どうこいつ意味だ？」

ゼブラス

「そうだ・・・。リムトの奴、夜逃げするかもしけん。何とかせねば・・・」

ゼブラスはまたリムトの部屋に入つた！

リムト

「何しに来た?」

ゼブラス

「ここに防犯カメラを付けるんだよ!」

ゼブラスはぱつぱと防犯カメラを取り付けると、さつさと帰った。

リムト

「ふふふ。私は逃げも隠れもせんのに・・・。あのカメラ、戦士が来たら壊させよう」

しかし、それは叶わなかつた。なぜなら、戦士たちはみんな暇を出してしまつたからだ!

一方、残念会のほうは・・・。

ゾルバ

「妖魔と人間・・・あと、幻魔や悪魔が笑つて暮らせる世、いつか出来るかな?」

ゲドウ

「組織産の妖魔の殲滅、人間に成り済ました邪悪な奴らの“破壊”も関わつてくるな」

そつ言いながら、コマのあほ毛をいじくるゲドウ・・・。

ゾルバ

「なあ、強姦ダンテス・・・呼んだほつがよかつたかな?」

ゲドウ

「ゴーガンダンテスだ」

?

「ゴーランダンテス……お前ら、あいつを知ってるのか？」

いきなり、  
変な男が尋ねてきた！

ゲ  
ド  
ウ

あ？ 誰だ、  
一体・・・。  
つて、松田優作！？

その男は松田優作・・・によく似た男だつた。

柳生

か？」

クレア

「ああ・・・。似ている」

ゲドウ

「俺、いつかゴーガンダンテスを倒したいんだけど・・・」

柳生

「ゴーガンダンテスは俺が倒したはずだが？」

ゲドウ

「はつ、はあ・・・ええ!?つてことはダンテスは幽霊!?うわつ

— — — !

その時、外ですごい音がした！

ゾルバ

「な、なんだあ！？」

外に出ると、ダフがひっくり返っていた。

ダフ

「あだだだだ・・・。なんだこいつ、こいつザキがあたらねえ」

柳生

「なつ！？」ゴーガンダンテス、生きてたのか！？」

ゴーガンダンテス

「久しぶりだな十兵衛！では・・・。

拙者の名前は、ゴーガンダンテス。幻魔界最高のお、剣士！！」

ゾルバ

「どうしたんだダンテス。なんでダフを攻撃した！？」

ゴーガンダンテス

「攻撃してきたのはダフのほうだ。中の人気が同じとか言い出して、襲ってきたのだ」

ダフ

「みのおやじとも、なかのひとがおなじだから・・・」

すると、上空から「ンブの触手が伸びてきた！」

リフル

「だから、ゴーガンダンテスには勝てないでしょって言つたのに・・・

・。帰るわよ！」

ダフ

「くそ～。つまらにあつときは、あのふえをつかつてやる～」

ダフはリフルと一緒に帰つた！

ゾルバ

「俺の夢、また一つ増えた」

クレア

「リフルを倒す夢か？」

ゾルバ

「いや、リフルのあのコンブみたいな触手を食べたい」

クレア

「・・・せいぜい頑張れ」

クレアは微笑んだ・・・。テレサのよう・・・。

てるてる

「さあーて、今夜は飲み明かすぞ～」

みんなは残念会をラグリー城で再開した・・・。

ラグリアス

「ヒルダ、お前も一緒に楽しんだり遊びだ・・・？」

ヒルダ

「いいんですよ。私はあなたが治るまで、一緒にいてあげますから。  
・  
・

ラグリアス

「ヒルダ、せつかく生き返ったところに・・・苦労をかける」

ラグリアスは泣きながら言った・・・。

そのころ、再生室から、一人の女がはいってきた・・・。  
そつとは知らず、まだ残念会は続いていた！

レイチエル

「まつたく、あのハゲども、俺達をこき使いやがって・・・。  
おらつ、猿つ！酒を注げ！！」

変態丸

「ひいい・・・。」んな筋肉女だなんて、聞いてないよ~」

レイチエル

「ああ、てめえ筋肉バスター喰らいたいか？ええ！？」

変態丸

「ひいいつーごめんなさいいつー！」

てるてる

「もつと、料理作れ、バカヤロー！..」

ラガン

「しゃあねえなー。池に住んでるアヒルを使つしかないな、こりゃ  
あ

ロレツ

「お酒、まだ飲むんですか？」

ゾルバ

「あ？ 女、お前も飲みたいか？」

ロレツ

「いえ・・・。まだ未成年ですから・・・僕・・・」

ゾルバ

「せっかく女妖魔だと思ってたのに・・・。  
妖魔にも女装少年がいたのか・・・！」

ルネ

「うん、この酒の味は銘酒・妖魔無双だな！」

フクロウナギ

「へえ、酒に詳しいんだね。

ところで、その髪型は何なの？魚を呼ぶ擬餌？」

いろいろ来ていた！

その時、バースースーツを着た何かが襲ってきた！

ゾルバ

「なんだ・・・！？」

てるてる

「メインディッシュの踊りか！？」

よく見ると、テレサだった！

クレア

「テレサ・・・?」

クレアは呆然とした。

ヘレン

「あひや? ハレカツて誰?」

すると、馬鹿な回答がでた!

ウロヤズク

「ばあさん?」

テレサ

「違ひ」

てるてる

「歌手?」

テレサ

「違ひ」

ゲドウ

「まさか・・・。お化け! -?」

テレサ

「違う」

レイチャエル

「みんな、分かつてねえな。三つ田のハゲの事だろ？」

テレサ

—それは天さんだ・・・

ケレアはしばらく眺めていたが、次第に目から涙が溢れ出した。

クレア

「テレサ・・・」

「お前は・・・まさか、クレアか？」

クレア

「テレサ……。テレサあ——・・・(涙)

テレサ  
「まったく、成長して一人前の戦士になつたくせに、まだ泣き虫だ  
な・・・」

テレサはそういうと、クレアの頭を撫でた。クレアはテレサに泣き付いて離れようとしない・・・。

ゾルバ

「感動的だけど・・・なんでテレサ、バースーツ着てるんだ？」  
罰ゲームか？」

ウロヤズク

「まさかあいつ、私のコスプレ用の服を！？・・・いや、何でもない

ミリアは今までのいきさつをテレサに話した。黒幕は組織で、ここにいる妖魔は善良な存在だということも……。

テレサ

「うむ……。私も組織が怪しいとは思っていたが……。ここにいる妖魔が無害なのは分かつていて。こんなマヌケ顔の奴らが人を喰うとは思えない……」

バク

「僕、マヌケ顔ですか？」

フクロウナギ

「わいは人喰うよ！」

そういうと、フクロウナギはユマを飲み込んだ！しかし、

テレサ

「別にいいさ、そんなくず……」

と、冷酷に言い放つた！

クレア

「でも……。腐つっていても、へたれでも大切な仲間……なんだ」

クレアはそう言つたが、その顔は明らかに笑つていた……。

W

そのころ、ゼプラスはリムトを監視していた。

ゼプラス

「あいつ、逃げないのか……。ま、逃げよつとすれどゲームで死ぬがな……」

ゼブラスがそう言つてると、同僚のてるてるとウロヤズクが来た。

てるてる

「まあか、この企画でゼブラスとまた会えるとはな……」

ウロヤズク

「リムトって、もしかしたら本体が別の場所にあるんじゃないのか? 地下深くに巨大な脳みそがあるとか……」

ゼブラス

「あいつ、一人暇そうだから、ショウヘイヘイヘイでも流してやるか

ゼブラスはリムトの部屋にショウヘイヘイヘイを流した!

ショウヘイヘイ

リムト

「な、なんだ……この声は……!」

リムトは苦しみだした!

と、思つとリムトは煙のようになんで消えてしまった!

ゼブラス

「あれ?」

てるてる

「もしかして……」

ウロヤズク

「倒した・・・!?」

すると、三人は大急ぎでみんなに報告した!  
すると、歓声が沸き起こった!

ゾルバ

「よくやつた! これで世界は安泰だ! !」

ゲドウ

「これでもう、半人半妖は生まれまい・・・。祝い酒だ! !」

ヘレン

「あとは・・・人間に戻れたら最高なのに・・・」

???

「ならば・・・人間になつちまえ! !」

突如得体のしれない妖魔が襲来した!

ダラウス

「人間にも、妖魔にもなれないやつあ、せつかくだから、人間になつちまえ! !」

ダラウスはヘレンに怪光線を放つた! ヘレンは食らつてしまつた! !

ヘレン

「てめーみたいな化け物は死にやがれ! !」

ヘレンは剣を持って腕を伸ばそうとした！  
しかし、伸びなかつた！

ヘレン

「あ・・・あれ？」

デネヴ

「ちょっと瞳の色を見せてみろ・・・」

デネヴはヘレンの瞳の色を見た。

なんと、瞳の色が人間と同じ色になつていた！－－！

ヘレン

「ま、まさか・・・あたし、本当に人間に・・・？」

ダラウス

「もうお前は忌み嫌われる半人半妖ではなく、か弱い人間だ。  
狩られる側になつたとはいえ、人間と結婚したり、子供産んだり出  
来るんだ。

うれしいだろ？」

ゾルバ

「今はお前の出る幕じゃないだろ！－－！」

ゾルバはダラウスを殴りつけた！

ダラウス

「あほつ！」

ダラウスは恐持てな暗黒妖魔から、マヌケそうなアホ面妖魔になつ

た！

「 ダラウス

「 やあ、おはよお！」

その変わりよひこ、テレサが・・・

テレサ

「 ダラウス・・・お前一体何者だ？」

ダラウス

「 僕はねえ、二重人格があるみたいなんだあ」

ダラウスの奇妙な喋り方に、テネヴは、

デネヴ

「 お前、なんでそんなになまつてるんだ！？」

ダラウス

「 あほつ！僕みたいな喋り方を習いたいのお？」

デネヴ

「 いや、習いたくない・・・」こともない

すると、ゾルバが尋ねてきた。

ゾルバ

「 なあ、ヘレンを・・・。人間になつてしまつたヘレンをまた元に戻せないか？」

人間になりたがつていたとは言え、まだ全てが終わったわけじゃない

いんだ」

ダラウス

「そうだったの？でも人間になってしまった限り、基本的にはどうすることもできないよお！」

ヘレン

「そ、そんな」

ヘレンは落胆した。その姿を見たダラウスは可哀想になつたのか、あることを提案した。

ダラウス

「それじゃあ、願い玉を持つてきてよー。」

ゾルバ

「願い玉？」

ダラウス

「うんっ！それがあれば願いを三つ叶えられるんだ！  
だけど、僕みたいな特殊な妖魔じゃないとうまく使えないみたい・  
・」

ゼブラス

「それは一体どう・・・？」

？？？

「私が持つてている」

と、声がした。

ゲドウ

「その声は……ばいきんまん!？」

?

「違うな」

ゾルバ

「正統文化」と「文化正統」

「こいつマジ無川（川無マジ）」

クレア

か？）「（心の声：テレサが焦っている・・・ そんなにとんでもないの

目の前に現れたのは黄金の像だつた！

リムト

驚いたか？」「え、わよ？」

テレサ

「お前よりゾルバの爆弾発言に驚いた」

リムト

「ああ、あれは半分だけ正解だ……」

## ゼブラス

「もう半分は？」

リムト

「ゾルバ、来い」

リムトはゾルバと一緒にどこかへワープした！

ゾルバ

「なんだ、ここは・・・」

そこは生物の気配がしない、黒い太陽がメラメラと燃えているという暗黙の世界だった！

ゾルバが眺めていると、黄金像に魂を移したリムトが襲い掛かってきた！

ゾルバ

「その黄金像・・・民から搾取した金から出来ているな？」

リムト

「そうだ・・・驚いたか？」

ゾルバ

「やはり、貴様はいてはならぬ者だ！！！」

变幻神化！！

そういうと、ゾルバの体は光りはじめた！

リムト

「变幻神化？」

ゾルバは光の勇者のような姿に変形した！！

ゾルバ

「妖魔一族の恨み、ここに晴らす……」

リムト

「何を言ひ。見た目が変わったくらいで勝てると思っているのか?」

ゾルバ

「見た目で判断すんじゃね……よ……」

ゾルバは持ち前の一刀流で黄金像の両手を破壊した!

リムト  
「くっ、だが私を葬ることは出来ん」

リムトはビームを放つてきた!

ゾルバはリムトのビームを剣で受け止めた! すると、剣が聖なる光に包まれた!

ゾルバ

「いけえええ——!!」

ゾルバはリムトの脳天に切り掛けた!

バリアは張られていた。

しかし、バリアは徐々になくなり、そして剣はバリアを破壊し、黄金像の脳天を切り裂き、体を一刀両断にした!!!

リムト

「6000字を・・・越えたというのかあ——!!?」

リムトは爆発した！

願い玉を落としていった……。

ゾルバ

「これで終わつたな……」

ゾルバが玉を拾つて帰らつとしたその時、ビーニーからカリムトの声が聞こえてきた……。

リムト

「ゾルバ、黒幕は我ら組織ではない……。  
我が組織を倒しても、あのお方を倒すこと出来ぬ……。ははは  
はは」

リムトの声が聞こえなくなつたあと、ゾルバはしづらしく立ち止まつていた。

そして、いりつづやいた……

ゾルバ

「ならば、黒幕を滅つすまで、戦い続けてやる」

ゾルバはそつといつて、元の世界に戻つた……。

みんなはゾルバを心配していた。

ゲドウ

「ああ、戻つてきたかゾルバ。クレイモアの奴らは帰つたが？」

ゾルバ

「そつか……。あと、願い玉を持ってきたぞ」

ダラウス

「あほつー。」それで願い事が三つ叶つねー。」

ゾルバ

「リムトが、黒幕はまだいると言っていた・・・」

ゼプラス

「つまり、奴らは一つの壁に過ぎなかつたか・・・」

ダラウス

「それじゃあ、願い玉で何とかしようおー。」

ゾルバ

「いや、願い玉の力無しで戦いたい」

ゲドウ

「せいぜい、頑張れよ」

ゼプラス

「お前は心靈嫌いを願い玉の力で治してもらはー。」

ゲドウ

「なつ、何言つてんだよー。」

また・・・平和が戻つてきた！

## 第6話・6000字耐久レース（後書き）

次回作のことを考えて、原作の所にドラゴンボールのカテーテゴリを追加！あと、お詫びが一つ。リムト、6000字いつてないのに死なせちゃった・・・。

## 第7話・もしもウンティーネがプロレスになつたら（前書き）

ウンティーネの筋肉を見ていたら思いついた。レイチャルより、こちらのほうが筋肉だつたので迷わずウンティーネでやつた。へたれ王子はあの人があつています

## 第7話・もしもウンティーネがブロリーっぽくなったら

ゾルバが無事に帰還して、喜んでいた妖魔達。しかし、ウロヤズクは青ざめた顔だった・・・。

ゲドウ

「どうしたんだウロヤズク。なんか、ヤバいことが起きたことを知つちやつたかのような顔して」

ウロヤズク

「やばい・・・。再生したウンティーネがいない（怖」

ゲドウ

「あの筋肉がどうした?」

ウロヤズク

「やつの再生の時に、悪ふざけでブロリーの遺伝子を組み込んでしまったのだ!」

?????

「やはり、ウロヤズクのくず野郎つぶりにまくじが出るな」

ゾルバ

「おつ?お前は!（笑」

ゾルバはしゃがみだした!で、?????の正体はガラテアだった!

ガラテア

「ラグリアスに、クラリスが自重しないくらい強くなりだしたこと

を相談しに来たんだが・・・

ゼブラス

「目のほうは治ったが、シスター・ラテア」

ガラテア

「ああ。お前の手術のおかげで、視力が0・7くらい回復したぞ。  
・・・そこのお前、なにしゃがんで私を見ている?ちなみに、今日  
穿いているパンティーは赤色だが・・・?」

変態丸

「にゃにいー?みへるーーーーーーーー(鼻血)

ゼブラス

「ガラテアさん、エロ猿が興奮するような事は、言わないことです  
な・・・」

と、言つて変態丸を吹き飛ばすゼブラスをよそに、ゾルバはこう  
言い放つた!

ゾルバ

「大女のパンツなんか、見たくないから。  
いや、しかし大きい女だなあ。俺でも見上げるくらい大きい女だな  
あ~」

ゾルバがしゃがんでガラテアを見ていたのは、ガラテアがさらに大きく見えるようにするためだつた!

ガラテア

「一度死んでみろ。お勧めだぞ? (怒)

ゲドウ

「どうやら、奴の中では、パンツよりも身長の事を言わるとキレるよつだな」

ウロヤズク

「ガラテアのパンティーは気になるが（HORRY）、それよりもウンディーネを早く探して、ブロワーの遺伝子を取り除かなくては・・・」

「

その問題のウンディーネは、ナース服で城内を徘徊していた。

ウンディーネ

「エリはゼリだあ？」

ウンディーネはキッチンに入った！

ラガン

「誰かと思つたら・・・。なんだ、ゴリラ野郎。勝手に野菜盗み食いすんなよ・・・」

ウンディーネは野菜に田を向けた！すると、ニンジンが田に映つた！

ウンディーネ

「・・・ぬうつ・・・。カ・カ・ロ・ツトオ～！～！～！～！～！～！～！」

ウンディーネはいきなりキレた！筋肉が凄まじく膨張し、田は白田になり、凄まじい妖氣を放出し始めた！

ウンディーネ

「カカロットはどこにいるんだ？」

そういうと、ウンディーネはラガンの頭を掴み上げた！

ラガン

「た、助けてくれ！」（涙）

ウンディーネ

「助けて欲しい？助けるってこいつらとかあ？」

ウンディーネはラガンを壁に当たた！

ウンディーネ

「出でこい、カカロット……」

ウンディーネは城のホールまでやつて來た。

ウンディーネはゾルバを見た！ゾルバの髪型がカカロットに似ていたので、ウンディーネはすぐさま襲い掛かってきた！――

ウンディーネ

「カカロットオ――――！」

ゾルバ

「なんだ！？」

ウロヤズク

「ウンディーネがキタヨ、これ――――！」

すると、ウンディーネは緑の玉を放ってきた！

ガラテア

「危ない！」

ガラテアはゾルバをつきどはし、代わりに攻撃を喰らってしまった！

ゾルバ

「大丈夫か！？」

ガラテア

「ああ・・・。私は防御型だから・・・。そんなことより、ウンティーネを早く・・・止めろ・・・」

ゾルバは城から出た！

ウンティーネはゾルバをカカロットと思っているのか、一緒に出てきた！

ウンティーネ

「お前が戦う意思を見せなければ、あたしはこの星を破壊し尽くすだけだあ！――！」

そういうと、ウンティーネはシャモ星人飼育場に向かつて緑の玉を放つた！

奴隸ども

「アツー――うわあ、きやあつ――――！」

ウロヤズク

「ああっ、放し飼いにしておけば勝手に殖える、食用にも実験動物にも奴隸にも使えるシャモ星人がああ――――！」

ウンディーネ

「ふむむむ…」うむむむむむ…」

ゲドウ

「あんなやつ、生かしておこたらい、本当の元の星は破壊しつくれた  
てしまつ——！」

すると、ウンディーネはまた暴れ始めた！

「カカロット、必ず血祭りに上げてやる……」  
「ンティーネ

ウンティーネはいきなりゾルバを殴ってきた！

## 「アーティスト全ではアーティスト」 ウンドティーネ

ゾ  
ル  
バ

# ウンドイーネ

ウンドイー衣は持たぬ縁の玉をジルバにぶつナた!

ゾルバ

ゾルバが嬌られているところ、援軍に来たオードリーは震えながらお

もらして  
いた・・・。

「みんな、殺される……。もうだめだわ……。おひめこよ……。  
(涙)」

すると、回復したがラテアがやつて来た！

「なんでもう少し休んでから、またセイントガーデンへ

オードリ

何言ってるの!? あいつは伝説の超筋肉なのよ!! ? ? ? 「

すると、城の奥からラグリアスがやって来た！

ラグリアス

奴に勝てには、  
変形<sup>ハ</sup>神<sup>ス</sup>するしかなしな。  
・  
・  
・  
・

ガラテア

## 「变形合神？」

# ラグリアス

「てるてる、ウロヤズク、ゲドウ、ラガン……変形合神だー！」

5人は集まつた！そして、こう叫んだ！

五  
人

# 「变・形・合・神！！！」

すると、五人は合体した。  
ポジションは

本体・ラグリアス

右手・ゲドウ

左手・てるてる

右足・ラガン

左足・ウロヤズク

と、なってあります！

ガラテア

「説明はいいから、早く行け」

ラドルガロ

「五人合わせて、ラドルガロ……では、行きまーす……！」

ラドルガロはウンティーネに向かつて突進した！

ウンティーネ

「雑魚が合体したとて、あたしを越えることは出来ぬう……！」

ラドルガロ

「ゾルバ、私と合体だ！」

ゾルバは変形して、ラドルガロの胸部にくつついた！

ウンティーネ

「なあにい！？」

# ラドルガルバ

「六人合体・ラドルガルバ、ただ今参上！！」

ウントイーネ

「なんて奴だ・・・！！」

# ラドルガルバ

ラドルガルバがマツキス砲でウンディーネを葬ろうとしたとき、ウンディーネの腹部を大剣が貫通した！

ウントライネ

大剣を投げたのはデネヴだつた・・・。

デネヴ

「……」  
「ウンティーネ……」  
「許せ、

ウンディーネは苦しみだした！ウンディーネの筋肉はしほみ、妖氣が消えた・・・。

ウントイーネ

デネヴ

「ウンディーネ、もう一度眠れ・・・」

デネヴは動けないウンディーネをお姫様抱っこして、奥の部屋まで

行つた。そして培養液の入つた水槽に入れた。

デネヴ

「これでよし・・・と。しかし、この部屋にはたくさんの再生された奴が眠つてるんだな・・・」

デネヴはウロヤズクにウンティーネの正常化を頼むと、黙つて帰つた。

その頃、ゾルバは何を思ったか、ガラテアをお姫様抱っこしてはいた！

ゾルバ

「お前、こういうことされたことないだろ？  
大きいのも罪だよな」

ガラテア

「お前、傷だらけなのに無理するな・・・。それに身長のことは言  
うな！」

だけど、うれしく思うぞ・・・（はあと

また、いつもの日々が始まる。

## 第7話・もしもウンティーネがプロリーっぽくなつたら（後書き）

プロリーっぽくないと言われてもなにも言えません。なぜなら、ウンティーネであつて、本人ではないからだ（当然だ）。しかし、クレアをお姫様抱っこしていたガラテアが、イケメン妖魔にお姫様抱っこされることになるとはな・・・。

## 第8話・まさかのキャラ紹介（前書き）

まさかのキャラ紹介。一応、クレイモアのキャラも紹介しているが、いろいろと崩壊しまくり（ここだけの設定もあり。マジなものもある）。キモい・エロい描写が一部あり。年齢も一応つけといた。クレイモアのキャラにも・・・。

## 第8話・まさかのキャラ紹介

### 妖魔の部

オリジナルキャラのみとなる

ゼブラス・・・妖魔幹部の一人。機械を改造したり、生き物を手術するなど、かなり技術に長けている43歳。

変態丸・・・彼女ができることなく28歳になつた変態妖魔。モスマンは友人。で、コマとモスマンでへたれ三人衆をやつている。

ゲドウ・・・妖魔界最高の戦士・・・らしい?が、心靈にはぶつ飛びほど弱いことが判明した。コマとは恋仲にある。25歳。

モスマン・・・UMAのはずなのだが、ここでは妖魔に分類される。昔から存在が確認されているにも関わらず、27歳と若い。

ゾルバ・・・妖魔一族の運命を守るために戦っているらしい。ガラテアの巨体を心配する23歳である。

てるてる・・・生き物の改造に長けた38歳。本編で出していた柄木弁がない・・・。黒いハゲ。

シユーボーン・・・松岡修造をモデルに作り出された妖魔。なので彼と同じ41歳（実年齢は生まれたばかりの赤ちゃん）である。とにかく熱い。鬼武者3のラスボスより熱い。が、えげつないストーカーで、ミリアの尻を狙つたために逮捕される。（ミコアの尻でアッ一！を企んでいたという、おぞましい説もある）

ウロヤズク・・・バイオ生物を作り出したり、人を生き返らせたり

するのが得意な39歳。コスプレが好きだが、6・7話で一着盗まれたようだ。長いかぎ爪で敵と戦える。

ラグリアス・・・妖魔皇帝。なんだかヒルダを気に入っている37歳のおっさん・・・だが、実はガラテアと同一年！？

バク・・・夢を喰らう妖魔。ビールの泡も食つ。フクロウナギはライバル。

ラガン・・・ラグリー城の料理長。盗み食いは見逃さないが・・・。実は強いという噂がある22歳である・・・。

ロレツ・・・女装少年の妖魔。女妖魔ではなかつたが、オッサンばかりの妖魔には珍しい15歳の少年妖魔である。女子の中に混じつて戯れるという野望を持つていてたりする？

フクロウナギ・・・深海魚の妖魔。食つて相手を無言即殺できる。

ダラウス・・・普段はおつとりとした口調で話す優しい妖魔だが、何かがあると凶暴化する。半人半妖を人間にすることができる。

ラドルガロ・・・ラグリアス、ゲドウ、てるてる、ウロヤズク、ラガンが合体した姿。何かと強い。

ラドルガルバ・・・ラドルガロにゾルバが加わった姿。格段に強い。ブロリーと互角に戦えそうだ。

クレイモアの部

クレア・・・主人公。だが、何かと暴走する。冷静そうで冷静じや

ない23歳。テレサが生き返ったため、仇討ちは取やめになつた。・。中の人繫がりで人間の内蔵を親父に食べさせられたとも？

ミリア・・・幻影で相手を翻弄する。が、幻影もろとも敵を吹き飛ばすようなキャラがいることを知らない。その姿から身体を狙われまくる27歳（中の人は17歳らしいが・・・）。タバサが真的ストーカーなのは知らない。

ヘレン・・・手足が伸びるゴム女（足が伸びる描[写]、見たことないが？）で、一部からは牝狐ヘレンと呼ばれたりする。たしかに、狐の様に狩りがうまい25歳。

デネヴ・・・再生力はピッコロと同レベル。ヘレンとは心と身体を許しあえるほどの友。ウンディーネも一應友人。ウンディーネが生き返つたにもかかわらず、打ち落として培養水槽へ封印したのは、剣を返したくなかったからという異説がある25歳。

タバサ・・・ミリアの真のストーカーらしい。しかし、妖気を感知する力はかなりのもので、アガサを倒すときは活躍した23歳。アーニメで紋章が二ーナになつてている所がある。ヒントはコマのヘタレが確定してしまつたあのシーン。

シンシア・・・おつとりしていそうなキャラだが、コマに対する毒舌はデネヴよりもムゴい。足がクレアよりも早いらしい・・・。回復を早めることができるらしい。が、回復封じも出来るため、コマが怪我するのを愉しみにしている23歳。

コマ・・・ミリアーズで最も弄られるキャラ。

普段はシンシアに弄られるが、ヘレンの怒りを買つたり、クレアにデデーンされたりすることも。ヘタレとは言え、彼氏にゲドウというハンサム妖魔がいるので、恋愛では7人の中で1番恵まれてい

るといえる（ただし、このせいでもうにシンシアにいじめられる。クレアにもラキという駒がある）。実はヤムチャより強くなつた！

ヒルダ・・・ミリアの心の友。一桁ナンバーになつたらミリアと一緒に戦おうと思っていた矢先、オフィーリアという、鬼畜女に改造されて覚醒者になつてしまつも、理性があつた。ミリアの手で死んだが、ウロヤズクの力で生き返つた28歳。現在はラグリアスの体の世話をしている。

ガラテア・・・大女。

公式では身長185センチとなつているが、185“メートル”的間違いだという説があつたが、さすがにそれはないと思われる2メートル女。37歳の年増だが、見た目は老けないので気にしてない模様。ゾルバに恋をしているという説も流れているが、身長を気にかけて恋愛を諦め、シスターになつてしまつたからには・・・。盲目になつていたが、ミアータの顔見たさにゼブラスの手術を受けて、視力を回復した。

オードリー・・・お笑い芸人でもない、女優でもない礼儀正しい美女。ただし、怯えると21歳にも関わらずおもらしをする傾向があり、決してプロリー・ヤリフルに会わせてはいけない！隠れへたれらしく、その情けなさに元ナンバー3のガラテアも呆れるほど。実はリフルも内心クズだと思つていたりw

レイチエル・・・真の筋肉女。“こついとは言え、レクセウスと間違えてはいけない。彼女の構えが「ゴルフを思わせるため、プロゴルファー・レイチエルと言われた21歳。ちなみに漫画のある場所に彼女のヌードがあるらしいが・・・？

ルネ・・・髪型がめんどくさそうな女。足は早いらしい。コンブに監禁されるも何とか脱出。相手の妖氣を操作させられそうになつたらしい。ここでは酒の飲み比べができる。さらにユマとは双子という驚愕の設定が出来た！（あほ毛、唇、垂れ目とかがそつくりだから）そのため、24歳。

テレサ・・・クレイモア史上最強。

アリシア、ベスも彼女の手にかかれば刺身と化す。リフルを刻みコンブにすることも出来たらしい。

が、クレア（当時12歳）と出会つて、人間らしさを取り戻した。クレアを人間に任せるものの、心配になりクレアの元に戻る。そこでお頭ドモンとダメキその他大勢の人間を殺害したため、バーロー達に追われることに。所詮クズはクズだった（イーレーネとプリシラ以外のやつ）。しかし、プリシラに情けをかけたために、討ち死にした。が、ウロヤズクの力で生き返る。クレアと出会つた時の年齢が29歳くらいだったので今は40歳くらいである・・・？

ウンティーネ・・・偽筋肉女。獅子男に倒されたが、ウロヤズクの力で生き返つた29歳乙女。なぜかブロリーの遺伝子が入つていたため、とてもなく凶暴化した。妖魔軍団が苦戦するほど強かつたが、デネヴに打ち落とされて、培養液の水槽に封印された。

幻魔（鬼武者キャラあり）

デレイク・・・目玉から触手が生えたような幻魔。ねるねるを手に入れようとした。喋り方がウザい。

ミツメル・・・天津飯にモヒカンが生えたような幻魔。食えるものは一応食う。牝狐の尻に噛み付いたりする。火炎放射で消毒作業をしだしたりすることもある・・・。

ゴーガンダンテス・・・変態紳士。名乗るのが趣味。髪型がアレだが、マジで強い。ダフとは中の人と同じとも言われている。十兵衛に倒されたらしいがなぜか生きている。

ジユジユドーマ・・・とてつもない不細工。だが、若い頃は美人だつたが、男を“食べ過ぎた”ためにこんな姿になる。一回だけ磯野フネになつたことがある。傘からビームを出したり、紛らわしい凶器で切り掛かつて来るなど、何気に強い。安国寺が助けに来ると、湿度が上がる。

ヒエール・・・氷のように冷たい幻魔。女をおもちゃ・モノとしか見ていないという外道っぷり。熱帯で絶対零度級の吹雪を起こせるほどの実力の持ち主。キスされた部分は凍傷になる。ミリアの胸を狙っていたら逮捕された。（ミリアの胸でぱふぱふしようと企んでいたという、とんでもない説がある）その他の部

ファービー・・・ギルデンスタンが改造したフクロウだとも、ウロヤズクが作り出した禁断の生命とも言われているが、单なるおもちゃだという説が有力。電子レンジで調理したり、バラバラに惨殺されたりと酷い扱いをされたりしているがシャモ星人に比べればまだ軽いらしい。

怪女・・・長い爪を持つ、四つん這いのハイジャンプ女。最初はガラテアのイタズラだと思われたが・・・。

フォーミュラー・・・ある実験のためにやつて来てくれた悪魔の幼女。兄のデスと、まさかの再開を遂げる。

デス・・・ある実験のためにやつて来てくれた悪魔の女装少年。口

レツというホモ達ができたアツー！

ケロニア・・・植物宇宙人。リフルがコンブなら、こいつは海苔。心を痛めて自爆した。

リムト・・・組織の長。バリアで攻撃から身を守つたが、ショウへイヘーイには負ける。が、魂を黄金像に移してゾルバに襲い掛かるも、爆殺された。6000字いかなくとも倒せた。

柳生十兵衛・・・鬼武者。銃で死ぬ際は、なんじゃこりやーーー！？と、叫びながら死ぬ。歌がうまいらしい。母親が美人。だが、ブスに殺害される。この日を境に鬼武者として生きることを決意。孫がオレ少女、親戚に闇野原ひろしげがいる。（闇野原ひろしげは松永久秀）

ダフ・・・イースレイ、リガルドの次に強いリフルの最愛の男。リフルの最高の彼氏。平仮名でしか喋れない。いきなり泣き出したりすることがある。リフルを受け止められるらしいが、どう考えてもクウラの地球が吹き飛ぶほどのボールを、体全体で受け止める力口コットみたいな状態を想像してしまうのだが。

リフル・・・一見かわいらしい少女だが、その正体は巨大な昆布型覚醒者。レイチエルにタコ女と言われている（これがリフルの逆鱗に触れた）。ルシエラとラファエラがくつついているという、大変価値のある生ゴミを拾ってきた。が、ウロヤズクガルシエラ2をひそかに造っていたのを知らない。ダフの最高の彼女。言うまでもないが、女戦士の中では最もババ・・・アツー！

シャモ星人・・・ブロリーが惑星シャモから連れてきた奴隸。だつたが、実は食料にも、実験動物にもできることが判明した！こ

いつらのおかげで何体の妖魔が人喰いをやめられたことか・・・。  
雑食でよく増えるらしい。一匹1000円くらい。ちなみに惑星シ  
ヤモが創業者の悪ふざけで消滅してしまったため、養殖者しかいな  
い。中にはペットにしたり、話し相手にしたりするようだ。

## 第8話・まさかのキャラ紹介（後書き）

明らかに幻魔が負けているので、活躍の場を与えねば！新たな幻魔も出さねば！

## 第9話・やつあたり（前書き）

アガサを殺しめる（「じりしめる」+「殺す」）くらいの話なので、長くない。まさかの本物登場！？

## 第9話・やつあたり

ラグリアスは願い玉の使い道をどうするかについて会議した。・・・。

ラグリアス

「一つ目ヘレンを元に戻す、二つ目は私の傷を癒す・・・」

するとゾルバが物申した！

ゾルバ

「我々の合体方法はセコいんじゃ・・・ないでしょ？」

話が逸れすぎていて、場の空気が重くなつた。  
が、ラグリアスはなんと・・・

ラグリアス

「そうだな。我々の合体方法は微妙かもしれん」

と、皇帝が話を変えてしまった！

ゼプラス

「では、ダイカイオーを使って我らの合体方法の糧にしますか？」

ラグリアス

「ダイカイオーって、何？」

ゼプラス

「色々と変形する“蟹”です」

ラグリアス

「そ、うか……。では、ちょっとくら捕りに行つてくるー。」

ラグリアスは軍を率いて行つてしまつた！

ゼブラス

「通販で買えるのに……」

すると、ヒルダがやつてきた！

ヒルダ

「あの……。私、ラグリアスに惚れちゃつたんですけど……」

ゼブラス

「は？」

ヒルダに惚れられたとは知らず、ラグリアスは軍（と、いってもいつもものパーティ）を引き連れて進んでいた。  
すると、目の前に死んだはずのアガサがいた！

ラグリアス

「か、蟹だ！」

みんな、奴を引っ捕らえろーーー！」

アガサ

「簡単に私を捕まえられる？」

アガサは触手で襲い掛かってきた！

ゲドウ

「うまそうな蟹だな～」

ゾルバ

「それは性的な意味でか？食欲的な意味でか？」

ゲドウ

「食欲的な意味でだよ。あんな眉毛無しくそババアなんかイラネ」

アガサ

「ふざ・けるな」

アガサは大地全体を豪快に耕した！

農民

「手間が省けただ」

すると、あとからゼブラスがやつてきた！

ラグリアス

「どうしたんだ？」

ゼブラス

「すいません、ダイカイオーは蟹じゃなくて、海老です」

それを聞いた途端、ラグリアスは心の底から怒りがこみあがつた！

ラグリアス

「よくもだましたな！…！」

と、ゼブラスではなくアガサに攻撃を当てる！

その威力は凄まじく、アガサはあつという間に本体だけになってしまった。

アガサは近くにあつたにんじんを引っ捌いて手に持つた！

アガサ

「近づくんじゃねえ……さもないと、このにんじんを食いつば……」

ラグリアス

「なんて卑劣な雌蟹なんだ……」

農民

「オラの野菜を返してクレア！」

農民は何気なく言った。

場の空気が、薄くなつた……。

アガサ

「それとも私に食べられたい？（性的な意味で）

ゲドウ

「うるせえ、このカビ野郎……」

この様子を、偶然通り掛かつた大男が聞いていた！

ブロリー

「・・・ぬうつ、カ・カ・ロ・ツト～」

ブロリーは縁の玉を放つた！玉はアガサにぶつかつた！！

アガサ

「ふざけるなあああ！！！  
ブロリイイイイ！！！」

デーテーン

アガサは爆発した！

ブロリー

「所詮、ベニーズワイガニはベニーズワイガニなのだ・・・」

ラグリアス

「次の回で主役やつていいぞ」

ブロリー

「なあにい！？」

ハハハハハ！－！そこなくては面白くない！－！」

次の回ではブロリーが大暴れするぞ！

## 第9話・やつあたり（後書き）

次回、ブロリーが荒坂長者やクレイモアの敵をヒートアーンしまくるぞー！もちろん、お頭もヒートアーンするぞーーー！

## 第10話・プロリモア（前書き）

クレイモアの敵キャラがブロッサーに破壊しぬけます。しかし、オチが・・・。イースレイの死に様がえぐい。しかし、ラキの扱いはおもしろい。

## 第10話・プロリモア

ある日、プロリーは盜賊に襲われている町に舞い降りた！

プロリー

「なんなんだ、ジイはあ？」

すると、クレア（幼少）を引きずる男と遭遇した！

リグ

「なんだ、お前は？」

プロリー

「プロリー……です」

リグ

「そりか。ヒジのガキを見てどう思つ？  
ムカつくから、たつぱり可愛がつてやつたんだ」

プロリー

「可愛がる？」

「プロリー」といつての可愛がる……殴る、蹴る、トトーン、キン

ブロリー

「氣が高まる……溢れる……」

「プロリーは覺醒した！」

ブロリー

「ふつ！」

ブロリーは奴隸どももろともリグを吹き飛ばした！

リグ

# 「俺の人生、返せよ！」

ブロリー

すると、お頭が現れた！

お頭

「たとえ、妖魔だろうと、隼の剣で切り刻んでやるよ！！」

ブロリー

「俺が化け物？違う・・・俺は悪魔だ！！」

お頭

「俺の隼の剣は、無敵なんだよーーー！」

ブロリー

「その程度のパワーで俺を倒せると思っていたのか？」

ブロリーは緑の玉をお頭にぶつけた！

データン

お頭

「マーマシ———！」（中の人繫がり）

お頭は消滅した！

盗賊

「頭がやられた！逃げろ———！」

ブロリー

「帰れるといいなあ～」

ベジータ

「みんな・・・殺される・・・」

ブロリーの縁の玉で、盗賊とベジータは町もわざわざテーン した！

ブロリー

「フハハハハ！！」

町を破壊しつくしたブロリーは、ある山に移動した！

ブロリー

「誰かいるのかあ～？」

すると、覚醒者の山男が現れた！

山男

「てめえ、なにしき来たんだ！？」

ブロリー

「俺はお前を破壊しつづくまでだーー！」

山男

「なつーー？」

ブロリーは縁の玉を山男にぶつけた！

山男

「な、なんで？」

デーテーン

ブロリー

「ふつ、所詮くずはくずなのだ」

ブロリーはまた出発した。次は海辺の廃墟と化した町にやつてきた！  
今度はソーメンが待ち受けていた！

ソーメン

「一気に力タをつけてあげーーー！」

ブロリー

「られるど、思つてゐるのか？」

ブロリーはソーメンの首を踏み付けた！  
ソーメンの首は切斷された！

ブロリー

「所詮、化け物は化け物なのだ」

ソーメン

「化け物は・・・あなたのほうじやない」

ブロリー

「俺が化け物？違う、俺はプロリー……です」

ブロリーはソーメンの首を掴み、回転して宇宙へ飛ばした！  
ブロリーは体を洗うためにある湖にやつってきた！

ブロリー

卷之三

ブロリーはすごい勢いで水の中に入つた！  
あたりに水しぶきが飛び散る！よく見ると、蛇みたいな覚醒者がいた。

ブロード

## オフィーリア

「あたしが・・・覚醒者にいい！－！」

オフィーリアは涙とよだれを垂らしながら叫んでいた！

ブロリー

「汚い・・・です」

ブロリーは緑の玉をオフィーリアにぶつけた！

しかし、簡単には死ななかつた！

ブロリー

「なあにい！？」

オフィーリア

—アンタがいなければ、こんなことならずには済んだのよ（怒）

と、やつあたりしてきた！

ブロード

「（サ）あたしとか）なんてサ一たん

ブロリーは仕方なく、

ブロリー

「ふむ、でもおれたあ……」

と、強力な縁の玉をぶつけた！

デ  
デ  
ン

## オフィーリア

「そ、そんな・・・（涙」

ブロリー

「八八八八八！」

ラキ

「あんなやつ、生かしておいたら、この世界は破壊しきくれんでし  
まつ。」

・・・ふおあつ！？

## キーン ドーン

ブロリーは野宿することにした・・・。  
そのころ、荒坂長者の息子が木の上にいた・・・。

ブロリー

「荒坂長者の息子・・・？」

ブロリーは気にしながらも眠った。  
そして、朝が来て、太陽が昇ってきた。すると、長者の息子は矢を  
太陽に向かつて放つた！

息子

「行け――――！」

ブロリー

「なんだ？（起

すると、太陽は射落とされたのか、消滅した！

ブロリー

「へあつ―?」

息子

「やつた――――！」

やつたぞ――――！」

ブロリー

「さすがだと褒めてやりたい、とでも思っていたのか！？」

ブロリーは縁の玉を上空で爆発させた！

デーテーン

息子は「デーテーン」しなかった。しかし、爆風が強烈で影も形も無くなつた！

ブロリー

「所詮、クズの息子はクズなのだ」

長者は悲しんだ。

長者

「年貢は帰つてくるけど、息子は帰つて来ん」

ブロリー

「息子が可愛いか？」

長者

「まあ、ええわい。来年、年貢を倍に取り立てりゃいい」

ブロリー

「・・・とうとう終わりの時がきたようだな」

ブロリーは長者の屋敷に特大のとつておきをぶつ放した！

長者

「あああつ――――――！」

デーテーン

長者は屋敷と米蔵もろともテテーン した！

ブロリーは虫けらを倒すと、不気味な古城に入り込んだ！  
すると、ダフが立ち塞がつた！

ダフ

「りふるは、こうさせねえぞ」

ブロリー

「その程度のパワーで、リフルを守れると思つていいのか？」

ブロリーはダフの顔を殴りまくつた！

ダフ

「いで、いでで・・・！」

ブロリー

「所詮、クズはクズなのだ」

ブロリーは緑の玉でダフの上半身を破壊しきくた！  
ダフが死んで、リフルは狂つたかのように暴れだした！

リフル

「うがあ――――！（狂い泣き）

ブロリー

「ふつ！」

ブロリーはリフルの脳天をテテーン した！リフルは動かなくなつ

た！

その時、ルシエラが現れた！

ルシエラ

「よく西のリフルを倒せたわね。

でも、この私・・・。南のルシエラには勝てない・・・」

ブロリー

「とでも思つてゐるのか？」

ブロリーはルシエラの腹部にパンチを入れた！  
すると、口が現れてブロリーの口に噛み付いた！

ブロリー

「なあにい！？」

ルシエラ

「驚いた？私の体に触れたものはみんな私に取り込まれるよ

ブロリー

「な、なんて奴だ・・・！」

しかし、ブロリーは緑の玉をルシエラの体中にある口の部分に押し込んだ！

ルシエラ

「あ、あ、つ―――！びいや、あ、あ、あ、―――！」

デーテーン

ルシエラは消滅した！

ブロリー

「ふふふ・・・フハハハハ！！」

その時、ライオンみたいな奴が現れた。リガルドである。

リガルド

「お前の戦いぶり・・・。見事だ」

ブロリー

「また一匹、虫けらが死にに来たか」

リガルド

「私は、ベロニカを真つ二つにじ、ウンディーネを叩き切り・・・。フローラを指一本で抹殺した獅子だ」

と、言い終わった瞬間、リガルドはブロリーに頭を掴まれた！

ブロリー

「なんなんだあ、その血戀話？」

ブロリーはリガルドをバラバラに吹き飛ばした！  
すると、矢が飛んできた！

ブロリー

「長者の息子、まだ生きていたのか？」

しかし、そこにいたのはケンタウロスみたいな奴だった。

## イースレイ

「お前を倒せば、この世界は平和になるんだ！」

ブロード

「平和ってなんだあ？」

ブロリーは突進した！

イースレイの右腕が消滅した！

「私の半身をもつて一ぐわは……」

ブロリーはイースレイの腹部を破壊した！

イ  
ス  
レ  
イ

「グワアアアアツ――――――――！」

ブロリー

「おとなしく殺されろ」

ブロリーはイースレイの左腕をもぎ取った！

イ  
ス  
レ  
イ

貴様の手加減というものを知らんのか！？」

「手加減つてなんだ？」

ブロリー

「手加減つてなんだ？」

そろそろ終わりの時がきたようだな……  
特大のとつておきだあ・・・・・！」

ブロリーはイースレイに巨大な緑の玉をぶつけた！

イースレイ

「死にたくないなあ……」

イースレイはみんなと楽しく過ごした日々を走馬灯のよつて思い出しながら朽ち果てた……。

ブロリー

「終わつたな……」

ブロリーが帰るつとした、その時、リフルが叫んだ！

リフル

「まだ、勝負は終わつてないわ！」

ブロリー

「おとなしく殺されていれば痛い目にあわずにすんだものを

リフルはダフ、ルシエラ、リガルド、イースレイの破片を抱えていた！

ブロリー

「ん？」

リフル

「変形合神！－！」

リフルはそういうと、破片と合体した！

リダルドス

我が名はリタルドス！！深淵なる力で貴様を討つ！！！」

ブロリー

「鮨魚のパワーを吸収したことで、俺を超える」とはできません!!

ブロリーはリダルドスを殴りつけた！しかし、効いていない！！

「なあにい！？」

「これで最後だー！ランストルネードーー！」

リダルドスは持っていた槍で竜巻を起した！  
ブロリーは遠くまで吹き飛んだ！

# リダルドス

「ブロリーなど、敵ではないな・・・」

10分後

「で、元に戻らないんですけど」

「医者  
知らん」

ラキ

「めでたし めでたし」

ベジータ

「でしゃばんなといつたはずだ」

ベジータ・ラキ

「ふああつー?」

キーン ドーン!!

テレサ

「ほつきりいって、ついて行けない（笑）

島左近

「よかつた。テレサが笑った・・・」

## 第10話・ブリモア（後書き）

動画にしたら、面白いだろうなw・・・で、プリシラが出てこなかつたのは、ラキが・・・。

## 第1-1話・願い（前書き）

最初はドリゴンボールみたいな展開になりますが、後半あたりでラキが自重しなくなる。ラキはクレアよりも、テレサのほうが好みのようだ！

## 第11話・願い

ラグリアスはついに願い玉を使うことにした。

ラグリアス

「では、一つ目の願い。ヘレンを元に戻す」

ダラウス

「あほつ！ヘレン、半分化け物に戻れてよかつたね！」

ヘレンはまた半人半妖に戻った。

ラグリアス

「二つ目の願い・・・。当初は、私の傷を治す予定だつたが・・・。ヒルダが私の体の世話をまだやりたいというので、リダルドスを元に戻したい」

ダラウス

「あほつ！リダルドスは五体に分離したよ！」

リダルドスは、イケメン一人と、筋肉と、美女と、ロリババアに分離した！

ラグリアス

「さて、三つ目はみんなから聞いて、抽選で選ぼう」

すると、みんなは自分の中の欲望をさらけ出した！

バク

「みんなの夢をむさぼり喰いたい・・・」

ラグリアス

「お前、声と容姿からは想像がつかん」と呟つた

ミコア

「ヒルダとチームを組みたい」

ラグリアス

「普通に実現するだろ」

タバサ

「隊長を私のものにしたい」

ラグリアス

「妄想の中に留めておけ」

デネヴ

「ヘレンの暴走を何とかしたい」

ラグリアス

「あいつより、クレアのほうが暴走していないか?」

ヘレン

「りんごをたくさんたべべつた〜〜」

ラグリアス

「毒りんご食つて、わつわと寝る」

シンシア

「ママをペッシュしたい」

ラグリアス

「もつなつてゐじやん」

ママ

「白馬の王子と結婚したい・・・（涙）

ラグリアス

「お前、頭おかしくないか？」

イースレイ、マイツと結婚してやれ

イースレイ

「絶対やだ。そんなブスいらない。」

第一、白馬じやないし

ゲドウ

「お前、俺の彼女だらうが！..！」

ママ

「ひいこつ！」

いろいろあつたが、またアンケートを取つた！

クレア

「ラキと再開したい・・・」

ラグリアス

「ちよつとまつてな・・・」

ラグリアスはテレサをバーーガールにした。  
すると・・・。

ラキ

「巨乳バーー美女が俺を呼ぶぜーー！  
ふおあつーーー！」

キーン ドーン

クレア

「ラキ・・・。成長したなあ。身長も、性欲も・・・」

テレサ

「・・・。私の願いは、あの色ボケ馬鹿猿を殴らせてくれ」

ラグリアス

「だから、もつとビックな夢を言ひてくれ」

すると、ゼブラスが物申した。

ゼブラス

「私の夢を実現させてくれ。

よく聞いておくれよ、ダラウス」

ダラウス

「わかった！」

すると、不埒者がでしゃぱり始めた！

ゼブラス

「地球温暖化を～、」

アガサ

「私に永遠の美貌を～（不埒者1）」

ゼプラス

「世界のありゆる争いを～」

ラキ

「巨乳美女クレイモアでハーレムをつくる…（不埒者2）」

ゼプラス

「この世から～」

ヤムチャ

「強くなりたいんだ」

ダラウス

「あほつ！ヤムチャ、強くなつてよかつたね！」

ヤムチャはめちゃくちゃ強くなつた！  
すると、不埒者2人が文句を言つてきた！

アガサ

「ふざけるなあああ…！…貴様あああ…！」

ラキ

「クレアの次は、テレサの胸に顔をうずめたかったのにい…！」

黄門

「ブロリー、ヤムチャー！あの欲ボケ悪党を懲らしめてやりなセー！」

ただ今、ヤムチャヒブロリーで欲ボケ悪党を肅清中！

ブロリー

「ふつ！」

デーティーン

アガサ

「アガアツーーーーーー！」

ヤムチャ

「特大操氣弾！」

ラキ

「ぐわや ああああーーー！」

デーティーン

ブロリー

「終わつたな」

肅清が終わつたところで、一同は解散した。

クレア

「テレサ・・・。」これからどうする？

テレサ

「お前と一緒にプリシラをぶつ殺すぞ」

ベジータ

「伝説の超覚醒者は、俺が見つけ次第ぶっ殺してやる……  
ほおああつーー？」

キーン ドーン

ブロリー

「ラキめ、おとなしくプリシラの身柄を渡しておけば、『豪美にテ  
レサの胸を揉めたものを・・・』

変態丸

「だつたら、俺がプリシラを・・・」

テレサ

「胸を揉みたいなら、レイチエルに頼め」

変態丸

「嫌だよ、あんなレクセウスみたいな顔の」

デーナン

ブロリー

「あれに関わるキャラとの干渉は許せぬうーーー！」

その頃、ラキが蘇った！

ラキ

「テレサの胸、揉ませろーーー！」

ブロリー

「クズが・・・。まだ生きていたのか」

その時、ガラテアが立ち塞がつた！

ガラテア

「揉むなら、私のを揉め！」

ラキ

「嫌だ」

ガラテア

「今日のパンティーの色は黒だが、見たいか？」

ラキ

「嫌だ」

ガラテア

「なぜ、私に興味を持たない？」

するとラキは正直にこう答えた！

ラキ

「お前、でかくてキモい」

すると、ガラテアはラキをぶつ飛ばした！そしてハイヒールのかかとの部分で股間を蹴りつけた！

ラキ

「おおあ――――――（悶絶

ブロリー

「所詮、ぐずはぐずなのだ」

クレア

「ラキ・・・。すっかりたくましくなったと思つたら・・・。  
お前のステータスは性欲が支配している」

すると、小さい女の子がいきなり現れた！

？？？？

「ラキを・・・いじめたなあ――――！」 イースレイ

「しまつた！」

イースレイは何をやらかしてしまつたのか、そして突如現れた女の子は一体・・・!?

## 第11話・願い（後書き）

最初はユマがいじられキャラだったが、今はベジータやラキ、ヤムチャが打って変わりそうだ・・・。ラキって成長したが、性欲はもつと性超しているんだろう？

## 第1-2話・全力で鬱（前書き）

ついに強敵プリシラとの激闘！！伝説のあの人まさかの敗走に、みんなはどう対抗する！？あいつらがフュージョンしまくる。

## 第1-2話・全力で鬱

プリシラはいきなりキレて覚醒体になった！

プリシラ

「ややまや全員殺したあと、ラキの内臓を食らってくしてやる」

すると、テレサがいきなり本気モードになつた！

テレサ

「よくも私が情けを一回もかけたといつのこと、殺してくれたな。  
もう容赦しない！！」

ルシエラせラフア ハラを呼んだ。

ラフア ハラ

「姉さん？」

すると、ルシエラはいきなり・・・

ルシエラ

「フュージョン！」

はあーー！」

すると、ルシエラとラフア ハラはフュージョンした  
しかし、ラフア ハラはいきなりの事だったので、まともに構えることができなかつた。

したがつて、フュージョンは失敗形態になつた。

ラフアルシ

「みやー

ヘレン

「なに、 ジのぬいへかよーかわぴー（トト）」

ラフアヒラ

「（心の声・すまない姉さん。私がもつとじっかりしていれば・・・）」

ルシエラ

「（心の声・別にいいわよ、なんだか好評だし）」

島津義弘

「おまは満足（ぬいパワー全開）」

ブロワー

「お前、 邪魔・・・」

イースレイはプロシリクを止めにかかった！

イースレイ

「やめんなだー！プロシリクーー！」

プロシリク

「あんた、（性的に）おこじくなかった

イースレイ

「ショックーー！」

イースレイはへこたれた！

ブロリー

「所詮、クズはクズなのだ」

テレサはヒラ姉妹のフュージョンを見て、テレサ  
「クレア！私たちもフュージョンするわ！」

クレア

「ああ。テレサの仇は討つ……！」

すると、ラキは叫んだ！

ラキ

「プリシラを殺さないでくれ……！」

すると、ピッコロが止めに入った！

ピッコロ

「何言つてんだお前は！？戦う奴らが全滅したら、お前は内蔵を食  
われちまうんだぞ！？」

そんなこんなしているうちにテレサとクレアはフュージョンしだし  
た！

テレサ・クレア

「フュージョン……」

テレサ

「はあ……」

クレア

「はあ・・・ハーケーション！…」

クレアはくしゃみをしてしまった…こちらも失敗形態になってしまった！

テレア

「私は、テレア！…」

見た目は幼少クレアだが、二刀流で、妖氣を読む力がさらに上昇した！

デネヴ

「見た目は可愛いが、あれで失敗形態！…？」

ブロリー

「テレア、可愛い！…」

すると、ブリシラは第二形態になつた…そのままの形態よりも筋肉モリモリに…

ブリシラ

「あたし、獅子や馬よりも、くまさんがよかつた」

ゾルバ

「何！久間さんとな？」

ゼブラス

「デタラメDNA鑑定の犠牲になつた者か？」

ブロリー

「違つ・・・。あ、熊だ」

すると、プリシラが挑発してきた！

プリシラ

「ブロッコリーさん、あたしに勝てますか？」

ブロリー

「アロリー……です」

と、言つていきなりアリシテに突進した！

ベジータ

だぞ！！

ベジータの警告を無視し、ブロリーはプリシラに殴りかかった！しかし、プリシラは隙をついて、ブロリーの腹部にパンチを繰り出

ブロリー

「カカロツトオオオ！！！」

## ブロリーは爆発した！！

「プリシラのパワーが勝つた……!!」

ブロリーが倒され、ベジータはさらに絶望した！

ベジータ

「みんな、プリシラに殺される・・・」

リフル

「大丈夫よ。あの子、あたしみたいな小さい女の子には手出しあないみたいよ」

すると、プリシラは

プリシラ

「こくら若作りしても、あたしを欺くことは出来ませんよ~」

と、言つてリフルの体を切り裂いた！

リフル

「ぐわやああああーー！」

ダフ

「り、りふるう」

リフルの破片は辺りに散らばつた！  
ゾルバはすかさずそれを口にした！すると、口の中での味が爆発

した！！

ゾルバ

「うまいー！」

そんなことじてないと、プリシラが襲ってきた！！

プリシラ

「パパを・・・パパを返してよ・・・」

ゾルバ

「ま、まさかお前は妖魔一族と人間との間に生まれた娘！？」

ベジータ

「なあにい！？」

実はプリシラは父が妖魔、母が人間だったのだ！

ゾルバ

「生まれた時から半人半妖の女・・・。

妖魔一族の恥としてその妖魔は一家の殺害を命令され、妻や長男長女と一緒に死んでるのを発見され、心中したのだろうと思われていたが・・・。まさか、生き残りが・・・」

それを聞くと、プリシラの怒りは頂点に達した！

プリシラ

「お前のせいで・・・パパやママ、お兄ちゃんにお姉ちゃんがあああ！――」

プリシラは第三形態になった！――

その姿は原作にもアニメにも登場していない形態だ！

ゾルバ

「ぐつ・・・・」

その凄まじい妖気に、状態異常に陥る者達が！

ラファルシ

「だにゃ―――!?」

「この妖氣、ヤバいにゃ！ルシラファじやなきや倒せないにゃ―――！」

テレア

「ひいいいつ、怖いよおー（涙）

ラファルシは可愛い猫になってしまつたし、テレアはちびクレアみたいに氣が弱くて泣き虫だつた！

ゼプラス

「面倒だから、ラキを喰わせよつか？」

トランクス

「あんな奴生かしておいたら、人間達は食い尽くされてしまうー。」

すると、カカロットはみんなから元氣を集め始めた！

カカロット

「これで奴を倒す！――！」

ラキ

「やめろおおおー！」

カカロット

「こいつを倒さなきや、人類は助からないんだーー！」

カカロットは元氣を集めはじめる・・・しかし、クレイモアのやつらが・・・。

ヘレン

「おえ——つ——！」（吐

デネヴ

「大丈夫か？ 実は私も限界に近い……」

ミリア

「プリシラ……。生まれた時から半人半妖……か。呪われた宿命だな」

「ようやく、カカロットは元気玉を作り出した！」

すると、プリシラは尖った指をいきなり飛ばしてきた！

カカロット

「くつ、ここで死ぬわけには……」

すると、

ラディッツ

「やめろ！ ……ぐはあ！ —」

なんと！ —ラディッツがカカロットの身代わりで、プリシラのフィンガーランスを喰らつた！

ラディッツ

「カカロット……。絶対に、あいつを仕留める！ —」

ラディッツは死んでしまつた！ カカロットはその言葉を聞いて、元氣玉をついに放つた！

元気玉はプリシラに直撃した！

プリシラ

「がぎや ああああーーー！」

元気玉が当たった場所に大きな穴が空いた。  
中央に人間体に戻ったプリシラがうずくまっていた・・・。  
ゾルバはすかさず、プリシラに近づいた。

ゾルバ

「お前を殺さねば・・・。妖魔一族の恥は・・・、みんなの怨みは・・・。  
消えぬ」

すると、プリシラは泣きながら命乞いした。

プリシラ

「し、死にたく・・・ないよお（涙）」

しかし、ゾルバの表情は冷たかった。

ゾルバ

「貴様、そういうて情けをかけた者を何人殺してきたんだ？」

プリシラ

「痛いよお、助けて・・・」

ゾルバ

「そうやつて、命乞いした奴をどれほど食い殺したんだ？  
俺はお前に怨みはない。だから、あの世に送つてやる。あつちなら  
お前の家族に会えるだろう。これが俺の情けだ。」

だが、貴様は所詮地獄逝きだらうがな！－！」

ゾルバがプリシラを斬首しようとした、その時！  
誰かがプリシラを助け出した！

ゾルバの剣は地面に深く突き刺さつた！

ゾルバ

「貴様は・・・ラキか！？」

ラキ

「なんでそんなにプリシラを殺そうとするんだ！？」

ゾルバ

「これは、人類のためだ・・・。もしも、人間の血が流れている妖魔がいるなどと知られたら、大妖魔がきつと許さない」

一同は大妖魔という、今まで聞いたことのない存在に耳を疑つた。

ゾルバ

「だから・・・。そいつを殺させてくれ

ゾルバが近づいたその時・・・！

巨大なツララが落ちてきた！

ゾルバ

「このツララは・・・、まさか！？」

ハイドレード

「話は聞かせてもらつた。我ら大妖魔によつて、人間も妖魔も半人半妖も覺醒者も、翻り殺しにしてやる・・・！」

上空で話を聞いたハイドレードは、凄まじいスピードで去つていった・・・。

ゾルバ

「これは・・・」

ゾルバ達は大妖魔と戦うハメになってしまった！

## 第12話・全力で鬱（後書き）

新たなる敵・大妖魔！人類は・・・クレイモアの者は・・・どうなる！？

## 第13話・衝撃的打ち切り（前書き）

突然ですが、このサイドストーリーは今回で終わります。そして新たなサイドストーリーが始まります！

## 第13話・衝撃的打ち切り

ラグリアスは自分も知らぬ大妖魔なる存在を知り、妖魔達に警告した！

ラグリアス

「大妖魔とやらに気をつける。奴らの強さ、我ら妖魔を遙かに凌ぐらしい。だから・・・」

ラグリアスが解説しているとき、ゾルバのケータイが鳴った！

ゾルバ

「なんだ？」

ゾルバは電話に出た！女装少年のデスからだった！

デス

「ねえ、パソコンやゲームをいつぺんにやつてるやつって・・・、わがままなのか？」

ゾルバ

「ああ？わがままじゃないだろ、普通のことだろ・・・」

よく聞いてみると、デスの声は泣きじゃくれていた・・・。

デス

「だよ・・・ね？」

ゾルバ

「当たり前だ。しかし、お前らしくないな。誰かに言えと齧されたのか・・・？」

デス 「あの・・・。H/M- 口ロスっていう、大妖魔・・・」

ゾルバ 「なにい――！？大妖魔あ――！？？」

すると、妖魔のみんながゾルバを見つめた！

赤マント 「何気にしてみたんだが・・・。なんだ、お前は・・・。自重しろ

よ～」

ゾルバ

「なんか、日本に大妖魔が現れたらしい・・・。H/M- 口ロスってやつが・・・」

皆は大妖魔と聞いてさらにしりぞいた！

しかし、ゼブラスはエミー 口ロスについて・・・

ゼブラス

「エミー 口ロス・・・。大妖魔事典で調べていたらあつたんだがな。奴は、機械を拒み、パソコンやゲーム、ケータイを信じられない、過去にしがみつく大妖魔だと・・・」

すると、ゾルバが物申した！

ゾルバ

「俺が倒しに行きます」

ラグリアス

「ああ、行つてくれ」

ラグリアスはゾルバたちを日本へ送つた。そして、残つたのはラグリアスのみとなつた。

ラグリアス

「遅いなあ、あいつら何やつてるんだ?」

すると、城に一人の男が現れた!

ダークラ

「よお、ラグリアス……」

なんと、その正体は第9天魔王・ダークラだった!

ラグリアス

「だ、ダークラ……な、何しに来たんだ!?」

ダークラ

「お前を退治しに来た……」

ラグリアス

「ちよつ、ちよつと待て!!

明日まで、明日までお待ちください!……」

ダークラ

「できぬう……!」

ダークラはラグリアスを吹き飛ばした！

ラグリアス

「アッー！」

ダークラ

「妖魔や幻魔よりも強い、地獄の悪魔が代わりにやるぜ！……！」

ラグリアス

「わ、我が野望がこんないい加減な結末を遂げるとは……。これも妖魔一族の定め……！？」

第13話・衝撃的打ち切り（後書き）

ラグリアス「我らの恨み、次のサイドストーリーで晴らしてくれる  
わ・・・」

番外編・ラグリアスが感じた、クレイモアに対する謎（前書き）

久しぶり。だけど、昔のよつて「タタタ」していない……。  
ラグリアスが今まで現れた覚醒者のとある共通点に気づいた！？

## 番外編・ラグリアスが感じた、クレイモアに対する謎

ラグリアス「サイドストーリー』』とか、もはやメインストーリーじゃないか・・・、『ヘルクラインムーブ柱』つてやつ・・・・・」

ゼブラス「久しづりなんだから、何かネタを・・・・

ラグリアス「そうだった！あのさ、12支星獣を見ていたらクレイモアのある秘密に気づいた」

ゼブラス「覚醒者と星座は関わってるんじゃないのかって話だろ？」

ラグリアス「お前が言つなよ！――！」

ゼブラス「悪い・・・・

ラグリアス「まあな、クレイモアに出てきた覚醒者は星座が関わってるんだよ！」

例えば山男。あいつはそり座だよな？」

ゼブラス「あの雑魚のどじがサソリなの？」

ラグリアス「腕の数とか、触手責めとか・・・・

ゼブラス「まあ、よくわかりませんが・・・・。他には？」

ラグリアス「リガルドは無論、しし座」

ゼブラス「そりやすぐにわかるよ！強さだつたらオエルのが圧倒的

だがな

ラグリアス「そういうやテレサ討伐隊のノエルってレオンの逆再生だよな?」

ゼブラス「それはともかく、お頭と中の人繋がりの武将がいるとかラグリアス「ああ、のことか。まあ、どう考へても闇スネ夫なのは変わりないが・・・」

ゼブラス「鮮血のアガサはかに座かな?」

ラグリアス「かに座キャラとしてはインパクトあつたよな。ただ、同じかに座キャラのデスマスクとボルキンサンサーが足を引っ張りすぎなんだよ!」

ゼブラス「イースレイはいて座だよな?」

ラグリアス「うん。あと、ラファエラとルシエラの合体はふたご座になるよな?」

ゼブラス「乙女座はプリシラかな?」

ラグリアス「・・・」

ゼブラス「どうしたの?」

ラグリアス「詰んだ」

ゼブラス「・・・え?」

ラグリアス「乙女座にあてはまるキャラがプリシラの他にも、ソーメン、リフル、ヒルダ、オフィーリアと・・・。多すぎるんだよ!」

ゼブラス「オフィーリアはうお座でしょう。あるいはハムレット的なナニカが・・・」

ラグリアス「鬼武者の真のラスボスの名前、絶対にハムレットだと思うんだが・・・」

ゼブラス「リフルは水瓶座だろ。ダフ=水瓶、リフル=水瓶持つてる人と解釈すればいい」

ラグリアス「無視か・・・」

ゼブラス「おうじ座とやぎ座の覚醒者はダフとリフルによってハつ裂きにされたし・・・」

ラグリアス「やぎ座出たか?」

ゼブラス「ああ? といふか、おひつじ座も出ましたっけ?」

ラグリアス「ああ? ってか、ソーメンのポジションは?」

ゼブラス「ソーメンは天の川。織り姫の星と彦星の近くにあるのはデネヴ」

ラグリアス「ねえ、デネヴとヘレンが姉妹ってマジ?」

ゼブラス「自作自演だろ、ありや」「

ラグリアス「じゃあ、ヒルダのポジションは?」

ゼブラス「ミリアを見守る星」

ラグリアス「じゃあ、ボーボボは?」

ゼブラス「ザザザーザ・ザーザザ」

ラグリアス「ちなみにイレーネという惑星があるらしい」

ゼブラス「惑星イレーネから連れてこられたバーロー星人か・・・。いつかは帰りたいと、星を眺めていたが、いつかは帰れるといなあ・・・(ポワーン)」

ゼブラスはそうこうと、惑星イレーネに向かつてアンサンブル・ブルース(白黒のエネルギー弾)を放つた!

テーン

ラグリアス「やつちまつたよ、この白黒妖魔!-!」

ゼブラス「天文学が狂う?冥王星がぶつ飛んでから言え!-!」

ラグリアス「できれば、組織の方の冥王星をぶつ飛ばしてくれ!」

ゼブラス「大丈夫!その手の犯罪者には、強力な獄闇毒を流し込んで爆死させるから!たとえ、名前も姿も判らなくても・・・」

ラグリアス「それはいい考えだ。だが、命無き者・・・いってはならぬ者には効くのか？」

ゼブラス「あ？」

ラグリアス「いい加減にしろ！…」

すると雑兵がやつて來た！

雑兵「申し上げます！プリシラがついに本性を現しました！」

ラグリアス「くそ・・・。プリシラめ！ラキと一緒にいたのはクレアを探すためで、今までの素直な一面は・・・斥候だったのかー？」

ゼブラス「斥候の使い方が怪しいが・・・どうする？」

ラグリアス「逃げるんだ・・・」

ラグリアスはそういうと、カナダにいる妖魔王・ゼイロンの元へ、スター・スクリームで逃げようとした！  
すると、プリシラが現れた！…

プリシラ「どこへ行くの・・・？」

ラグリアス「お、お前と一緒に、避難する準備だ・・・」

プリシラ「一人用の戦闘機でか？」

妖魔皇帝・ラグリアス（37）、「特大ピンチ！…」

番外編・ラグリアスが感じた、クレイモアに対する謎（後書き）

星座もそうだけど、惑星や神話のキャラも・・・。  
ところで、クレイモアの筋肉とオモラシはどこへ行ったんだ？

クリスマス企画ー? (前書き)

クリスマスのちよつとした予告ー??

## クリスマス企画ーー?

ゼブラス「そういや、もう少しでクリスマスなんだよな・・・しかし、ダークラはイスラム圏のトルコ出身だから・・・。ダークラは去年あたり、クリスマス中止を促す企画をやっていたというが・・・。もしさうだとしたら・・・!」

一方、プリシラと出くわしてしまったラグリアスはといふと・・・。某ファミレスでビーフハンバーグを食べていた・・・。

ダークラ「お前、よく生きて帰ってきたな!」

ラグリアス「プリシラなんてへボだよー!」

絶体絶命のペンチに、ラグリアスは何をしたのかといふと・・・?

プリシラ「どこへ行くの・・・?」

ラグリアス「う・・・ぐ・・・(心の声・そつだ!たしかこいつ、家族に会いたがっていたよな?つてことは・・・)」

プリシラ「答えを言わないと、殺すよ?」

ラグリアス「お、お前の親兄弟を探しに行く準備だ!」

プリシラ「なんだ・・・あたしのパパやママ、お兄ちゃんにお姉ち

やんを探そうとしていたんだ・・・。

ならば、あたしをスタースクリームに乗せなさい！」

ラグリアス「ああ、いいよ！これに乗ればお前の愛する者の元へひとつどびだ！」

ラグリアスはプリシラをスタースクリームに乗せると、上空へ飛ばした！

ラグリアス「ふふふ。プリシラのクズ野郎め・・・。これで異次元へ送つてやる！！！」

アーリア・アクタ・エスト――つ――！」

ラグリアスはそう叫ぶと、不気味な気体でスタースクリームとプリシラを被うと、強力な風で吹き飛ばした！

なんと、上空を飛んでいたはずのスタースクリームと機内のプリシラは消えてなくなつた！

ラグリアス「どうやら無事に異次元へ送れたようだな・・・」

ラグリアス「と、いうわけだ！」

ダークラ「プリシラなんて、所詮キガイの覚醒者だろ？」

イースレイ「そうかな？しかし、プリシラのせいで俺の阪神はあのときに負けたんだ・・・」

ダークラ「お前いつの間に阪神ファンになつたんだ！？」

イースレイ「プリシラに半身を吹き飛ばされてから、阪神に目覚めた」

ラグリアス「お前、ひょっとして、ギャグに便乗したのか！？」

ダークラ「ラグリアスよ、そんなガチムチウホツな覚醒者は無視して、俺の話を聞け！」

ラグリアス「なんだ？」

ダークラ「お前、俺と一緒にクリスマスをぶつ壊さねえか？」

ラグリアス「何言つてんだお前！？ そんなことしたら、宗教戦争起きるぞ！？」

ダークラ「だから、無宗教のお前と共にクリスマスをぶつ壊すんだ！」

ラグリアス「ああ、私はバイオの力で生まれた妖魔だからな・・・」

そんなことを言つていると、懐かしのあのキャラが現れた！

リュウハク「某英國女性はレプティリアンとほざいたのは誰だ！？」

ダークラ「おお、リュウハク！ 久しづりだなー！」

リュウハク「リーマン兄弟のつじつまを合わせるのに手間取つて、

なかなか出られなかつたのだ……

ラグリアス「リュウハク、なぜ今更やつてきたんだよー！」

リュウハク「ダークラがクリスマスを破壊しつくしたいとか言い出してきてな……。ちと面白いと思つてな」

ダークラ「だから、凌煌帝・オエルはオメガ達に任せといた」

リュウハク「しかし、子供の夢を踏みにじる」となど出来ぬよー。」

ダークラ「クリスマスを迎えない子供だつている……。だから、俺はクリスマスはプレゼントをもらえると思つてているクソガキどもに絶望を見せてやりたいんだー！」

リュウハク「うむー。クリスマスとほゞかく人間どもに絶望を見せてやるつやー！」

ラグリアス「宗教戦争になつたらどうするんだつてー？」

リュウハク「なあに、部下が何とかしてくれるわ」

ラグリアス「まあ、いいか。我ら三傑が久しぶりにやろつたんだ。例のあれをやるぞー！」

ダークラ、リュウハク、ラグリアスは持つていた剣を重ね合わせた！

リュウハク「で、企画はどうでやるんだ？」

ダークラ「もちろん、『ヘルクライム7-8柱』でやるんだよ。 24

田・25田の2日連続だ！

ラグリアス「なに！？では、『幻魔と妖魔』はただの広告がわりか

！？」

ウエイトレス「あの・・・。当店へ凶器を持ち込むのはやめくだ

む！」

ダークラ「シユワツト！」

はたしてクリスマスは破壊されてしまつのか！？

## クリスマス企画ー? (後書き)

ネタバレになるけど、クリスマスを破壊しようとしたダークラの元に第7天魔王のフランダースがやって来て・・・みたいな感じになる。(結果的にクリスマスは破壊されない?)

## 現実と空想が織り成す時（前書き）

題名がロマンチックだけど内容は・・・。最後のほうは意味不明す  
べの合唱になつてゐる。

## 現実と空想が織り成す時

ラグリアス「つたく、クリスマスのせいでもた厄介な敵が増えちまつたな・・・」

リュウハク「メイドの『お帰りなさいませ、』『主人様』が、わしにとつてはMAXハッピーホリデーなプレゼントだつた・・・」

ダークラ「過ぎ去つた過去は忘れて、ある企画をやるのと黙り。題して、『現実と空想が織り成すどんなんことになるか?』」

ラグリアス「なんだよそれ!? 意味がわからんから、詳しく説明してくれ」

ダークラ「要するに、戦国 双やつてると、人を殺してもいいという感覚に囚われる・・・。

という勘違いに惑わされ、ゲーム=悪と思念に囚われた馬鹿のこととをいうのだ!」

ラグリアス「わかつた!」

リュウハク「ダークラ、オヌシは例えが理不尽よなー!」

と、いうわけで三人は現実と空想がじりぢりまぜになつた時に起つりうる現象を挙げてみた!

ダークラ「例えれば『ドラえもん』が何とかしてくれる『かな?』

リュウハク「『』でもドアで宇宙へポイ! ってか?」

シャモ星人「ドラえもんなんて、蒼い悪魔さ!」

ブロリー「チツ! !

ブロリーは邪魔なシャモ星人を『』した!

ダークラ「『ダークラが何とかしてくれるとと思つた』と言つていれば、殺した相手を俺がソセイガで生き返らせてやつたのによ···」

リュウハク「あとは『悪魔にとりつかれてやつた』とかな?」

ラグリアス「たしかヤギだかウサギだかヒツジだかの名前の奴が言つてたんだよな?」

ダークラ「そういう言い訳するやつ事態が悪魔。とりつく側にある。そして、人にとりつくとか···。そんな芸達者な悪魔はあまりいらないな」

ラグリアス「他は『一撃で殺せると思つたが中々死なかつた』とかか?」

ダークラ「凡人が簡単に敵を殺害出来るわけがない。一撃で敵を倒すには、攻撃力が相手の防御力を圧倒的に上回る、スターを使う、一撃必殺を駆使するとかだな。こんなこと言つてる俺も危ないかもしない」

リュウハク「なあに、安心しろ！この世界では日常茶飯事ではないか！なにせ細菌にだつてHPがあるのでだからな」

例：オリゼー・HP0・00000003

ダークラ「他に『リセットすれば生き返る』という、なんともチートすぎる名言があつたりする」

リュウハク「人生は一度きりだといふのに・・・」

ダークラ「でも輪廻で人生をリセットしても大丈夫かな？」

・・・別の存在として生きることになるが・・・

ラグリアス「そんな恐ろしいことはどうでもいい」

リュウハク「どうでもいいのか！？」

ダークラ「あとは『全ての人間は凡人と天才の二種類に分けられていて、天才は新世界のためなら人を殺してもいいし、新たな法律を作る権利を持つ』と、いう理論」

リュウハク「わしは天才に入るかな・・・？あ、ドラコニアンドから、人間には入らないではないか・・・」

ラグリアス「私も妖魔だし・・・。大体、同種との戦いは躊躇する」

ダークラ「クレイモアはその同種を斬り殺してやんけ！！」

ヘレン「はあ？何言つてんだお前！？あたしたち、人間だぜ！！」

「アーロー、アーロー、アーロー！」

ヘレン「どうつー!?

ヘレンは左目を攻撃された！

ヘレン・アーリーこそ、妖魔そのものだ……」

備が妖魔・・・・・遣・・・・・備はハ口・てす

「とか」  
「ダーカラ」まだまだあるぞ！『三成、頑張つてね？（by 福島正則』

孫悟空 かう! 気持をねりい  
嫌だ その武将!

ハニカム お前の話が通じた

ノリタケノコトガスノテカ

テクリアス一確かに、あの顔でそんなセリフ言われるとか、死の宣告喰らうよりもキツイ」

ダークラ「なにせ、どーしょーもないつ馬鹿だからな」

ラグリアス—馬鹿と

リニウバケー 大黒鹿と

ダークラ「どーしょーもないつ馬鹿で・・・」

左近「馬鹿力が出せますよ」

## クレア「馬鹿と」

ヘレン「大馬鹿と」

「マジでーしなーもなーいつ鹿獣で・・・」

左近「馬鹿力が出せますよ」

ベジータ「馬鹿と」

孫悟空「大馬鹿と」

左近「馬鹿力が出せますよ。大切なことなので三回いいましたよん？」

## 現実と空想が織り成す時（後書き）

他にも書いつとと思ったネタがあつたけど、思いだし次第また書くつ  
もり。後悔はしていない・・・。

## 一次元の世界へ（前書き）

ダークラ達が一次元の世界へ行くといいだした！果たして彼らは一次元の世界へ行くことが出来るのか？そして、笑劇の結末が！？かなりハザードがキテるので、注意！

## 一次元の世界へ

ダークラ「おまえらは、一次元の世界に行きたくはないか？」

変態丸「行きたいよ！…とつても」

リュウハク「たしか、アウターリミッジにもそんなネタがあつたな…」

ダークラ「一次元行きたい奴、この指に止まれ！」

すると、大勢の人がダークラの指に止まつた！

ヘレン「一次元の彼氏と結婚するのが夢なんだ！」

ミリア「私も一次元の世界へ行き、永遠の17歳として…人間として生きたいと思っているんだ！」

クレア「私と同じ考え方の奴がいてくれて嬉しいよ

ヘレン「きひひ…」

ブロリー「オタクの女…！？」

芹沢「オタク文化は、男だけのものではない…！…」

藤本「そういうアンタも一次元へ行つて、フサフサの髪の毛を手に入れたいんだろ？」

芹沢「ぐつーーー！」

ダークラ「一次元の可能性は無限大です。さあ、みんなで一次元へ行く方法を考えましょうー！」

みんなはダークラに大喝采した……一部の者を除いて。

デネヴ「馬鹿馬鹿しい！」

トランクス「みんな、何か勘違いをしていないか……？」

ベジータ「どれ、俺も参加するか……」

トランクス「ダメです！ あんな話にのつては……」

ベジータ「一次元好きを気持ち悪がる奴はついて来なくてよいーーー！」

ベジータはそうこうと、『一次元の世界へ行こうの命』の一員となつた！

みんなは一次元の世界へ行く方法を話し合つた！

ヘレン「ペツちゃんになつて、紙に張り付くつてのはよ？」

ダークラ「それを言つたら、ヒラメやカレイは一次元の生き物か？」

変態丸「えつーーあの魚つて、一次元から迷いこんできた生き物じゃなかつたのーー？」

クレア「そんな訳無いだろ！…」一次元の魚にあんな厚みがあるわけがない！」

リュウハク「確かに、アウター・リミッツでは電磁波を駆使してオサー  
ンを一次元へ送つてたぞ？」

サーチャー「一次元へ行きたい者をデータ化して、プログラム生命  
体に加工すればいいのでは？」

リュウハク「無視か…」

ダークラ「それはいい考えだ。しかし、それは可能なのか？」

サーチャー「一次元の世界でなら実現可能です！」

ダークラ「それじゃあ、意味ないんだよ！」

ヘレン「ああん、早く一次元の彼氏と結婚したい！」

ラグリアス「その彼氏を一次元化するのはダメか？」

ヘレン「ダメに決まってるでしょ！三次元は困難が多すぎるもん！  
！」

ミリア「一次元に行けなかつたら、妖魔皇帝のお前に死んでもらわ  
なればならない」

ラグリアス「なんで！？！？」

ブロリー「俺は一次元へ行き、宇宙を何度も破壊し尽くすだけだあ

！」

ダークラ「一次元ならば、またリセットでやり直せる・・・。三次元には存在しない特長だ」

ラグリアス「そして、一次元の産物は無限に増殖できる。二次元も出来ないことはないが、数に限りがあるだろう」

リュウハウク「コピー機能か？」

ゼブラス「私の分身も、この機能があれば無限に増殖可能だ・・・」

変態丸「俺も百体になりたい！」

ダークラ「ただでさえ邪魔なお前が百体も増えたら、目障りだ！」

変態丸「わーーーん（泣」

ダークラ「その憎しみ、悲しみも・・・一次元へ行けばなくなるんだ！・・・条件次第で・・・」

クレア「ダークラ、お前は人を一次元へ送る魔法とか習得していいのか？」

ダークラ「残念だが人を一次元へ送る魔法はない。しかし、人を性転換する魔法、万物の病気やケガを治す魔法、食べたい物を好きなだけ出せる魔法とかなら習得している」

リュウハウク「オヌシ、そんな魔法を持っているなら、それを平和に活用することは出来ぬのか？」

ダークラ「それはどうでもいい」

ラグリアス「とりあえず、理論を出し合っていてもあればから、ぶつつけて一次元へ行つてみよつ！」

ダークラ「まずはパラガス、お前が行け！」

パラガス「いいぞお！」

パラガスは一人用のポットに入つた！

ダークラ「実験その1・超高速で萌えアニメにぶつけたら入れるか？」

見ると、テレビで萌えアニメをやつていた！

ブロリー「親父い・・・」

パラガス「いいぞお！」

ブロリーは萌えアニメに向かつてパラガス入りのポットを投げつけた！

テレビはパラガスもろとも爆発した！

孫悟空「ダメだ！」

ダークラ「まつ、 そうなることはわかつてたけれど・・・」

リュウハウク「実験その2・すごい力で漫画にたたき付けたら、二次元へ行けるか?」

孫悟空「ベジータ、行け!」

ベジータ「ダニィー?」

ブロリー「フハハハ!..」

ベジータ「ふああー!?」

キーン ドーン!!

ベジータはブロリーによって漫画にたたき付けられた!しかし、ベジータは漫画には入れなかつた!

リュウハウク「無論、これらの行為は遊びに過ぎぬ」

ダークラ「一次元が我らを誘拐してくれれば・・・」

みんなの妄想が怪しくなってきたのを心配したラグリアス。何を思つたのか、いきなりダークラに殴り掛かつた!

ラグリアス「コタツ零式!..!..」

ゴーン!

ダークラ「邪魔だあああああつ!..!..」

ダークラはラグリアスを殴りとばした！すると、トランクスが介入してきた！

トランクス「あなたたちは、すでに一次元の住人ですか？」

ダークラ「すっかり忘れてた！！！」

トランクス「なぜ一次元が一次元に行く必要があるのですか！？」  
次元へ行くのならまだしも」

リュウハク「なんだ、もともと一次元ならば」ことする必要は  
なかつたではないか！」

こうして事態は解決した。

## 一次元の世界へ（後書き）

結果：一次元の住人は一次元へ行こうとは思わないこと。元々、自分が住んでいる次元なのだから・・・。

## 一次元の世界へ・補足（前書き）

ついさっき、一次元の世界へ行く方法がわかった。実はあのキャラが一次元と三次元へ行き来出来たのだ！

そのキャラはみんながよく知っている、あのお姉さんだよ！

## 一次元の世界へ・補足

前回、「一次元の世界へ」で自分達はすでに一次元の住人だったことに気づくというオチだったが、考えてみれば一次元と三次元を行き来できる奴がいたではないか！

山村貞子という女が！！！

なんで今まで気づかなかつたんだろ？？なぜ貞子がすぐに思い浮かばなかつたのだろうか？？？それが1番わからない！

とりあえず、貞子に頼んでテレビの中に引きずり込んでもらえばいいのだ。電磁波で一次元の世界へ行くよりもはるかに安全だと思わないか？まあ、貞子がいい人だったらの話だが？？？

よくよく考えると、貞子の倒し方って簡単じゃない？出でくる前にテレビ消せばいいし、ビデオをぶつ壊せばいい。ぶつかけ言つと、リングの内容はよくわからないので、電源消そつがコンセント抜こうが全く効果がないといつ展開があるのでならば、テレビをぶつ壊してしまえばいい。

はつきり言つと、貞子は他のテレビに入れるのだろうか？つまり、再生しているビデオ以外のテレビに侵入出来るかということ。もしも出来ないのであれば、行ける一次元はあの井戸のところだけであり、非常に狭い世界となつてしまつ。

結論からすると、貞子は・・・ん？ちょっと待てよ？貞子は確かに自分の精子を自分の卵子に受精して自分を生み出すことができたはず。ならば、その子供を別の一次元へ送り込めばいい話ではないか！そうすれば自分がその一次元」と滅んでも、他の一次元にいる娘が生き残つてくれればまた増殖することが出来るという利点があるではないか！なんといつもミステリークレイフィッシュだ！

といふか貞子さん、もつビデオから卒業して、DTDやブルーレイに移行したらどうだ？そうすれば画質が良くなつてパワーアップ出来るかもしませんよ？

そして、他の一次元へ行けるようになれば、どれほど多くの人々を救済できるか分かりますかな？金儲けに利用するか無料で実施するかは貞子次第だが、化け物としてではなく、聖女として崇められることになるのは間違いないだろ？そして自分と同じDNAを持つ娘や孫と一緒に幸せに三次元の住人として暮らせるとよくなれるといいね！

## 一次元の世界へ・補足（後書き）

戦国無双3で山村貞子を作った。ロン毛がないとかマジありえねーから！

だからポニー・テールになつた(・。・。・)

## 好きなものだけ食べていきたい（前書き）

これは、ラグリアスがダークラを助けにいく最中におきた出来事である・・・。

今回は下ネタ、グロ、残虐なシーンがあるので注意しそうーあと、ほとんど題名通りじゃないぞ！

好きなものだけ食べていたい

ラグリアスは戦闘機で京都へ向かっていた。そのとき！大きな鳥が現れた！

大鳥「があつー！があつー！」

ラグリアス「じゃ・・・邪魔だヴォケ！・・・」

ラグリアスの魂の叫びも虚しく、大鳥のクルミをぶつける攻撃によつて戦闘機は墜落してしまつた！しかし、ラグリアスはなんとか生きていた！

ラグリアス「なんとか助かつたが・・・。戦闘機はめちゃくちゃだ！よくみると、30個くらいパーツが紛失している！！一刻も早くパーツを取り戻さないと、新幹線で行くことになつてしまつ！」

ラグリアスはさつそくパーツを捜しはじめた！三時間後、気合いでパーツを20個取り戻した！

ラグリアス「ぜえぜえ・・・。」んなに苦労しておきながら、あと10個も残つてる！

ラグリアスがそうつぶやいていると、突然クレアがハリセンで高速剣をぶちかましてきた！

クレア「何やつてるんだ！」

ラグリアス「こいつのセリフだ怒阿呆！！！私のしなやかな髪の毛

が一瞬でボサボサになつたぞ！？」

クレア「ところでお前はどんな食生活を送つてゐる？」「

ラグリアス「全力で話そらしやがつた！－（＼＼＼＼＼）」

クレア「今日、何食べた！？」

ラグリアス「えーっとまあ・・・。ハンバーガー四個は喰つた・・・」

クレア「信じられん！－なんという栄養バランスの悪さだ！－！－！」

ラグリアス「人間の内臓しか喰わない妖魔よりはマシだろ－パンとかついてるんだからさ！－」

クレア「それでも肉が大半を占めている！－！」

ラグリアス「そんのはどーでもいいから、戦闘機のパーツとか持つていたら教えてくれよ！－」

クレア「私は持つていないが、ヘレンは持つていた・・・」

ラグリアス「じゃあ、今すぐ呼べ！－！そのパーツを渡してもううそ！」

クレアは早速、ヘレンに電話した！

クレア「大至急、大阪に来てくれないか？」

ヘレン「ちょっと待つてな――！」

三時間後・・・。

ヘレン「待たせた?」「めーん！」

クレア「待たせすぎ」

ラグリアス「ヒマだったから、パート探してた。すると5個見つかった。残り5個見つければ京都へひとつじびでれるー。」

ヘレン「ふーん」

ヘレンは何食わぬ顔でフライドチキンを喰っていた・・・。

クレア「ヘレンーまた今日もフライドチキンとロングゴビールで夕飯を済ませたなー。」

ヘレン「なんだよ！あたしの食生活に文句つける気か！？」

クレア「脳梗塞で死ぬぞー！」

ヘレン「別に脳梗塞になつたつていいもん！そんなにいうなら脳梗塞になつて死んでやる！――」

ルヴル「お前らみたいな奴らで戦死せずに病死する奴は珍しいな

ラグリアス「とこひで、私のパートはどうだ？」

ヘレン「あ？パートは知らないけど、タコ焼きを入れるのにうづ

てつけの容器はあるぜー！」

ラグリアスはその容器を見て愕然とした！なんと戦闘機のコックピットのガラス部分の先端のパーティだつたのだ！

ラグリアス「馬鹿かお前ー！それは小綺麗なガラスの器かなんかじやないぞーーー！」

ヘレン「くつ？」

ヘレンは豆鉄砲を喰らつたような顔をした！

パラガス「お前のアホ面、お笑いだぜー！」

ラグリアス「山田アアアアアツツツツーーー（邪魔だアアアアアツツツーーー）」

パラガス「どうわつーー？（ぶつ飛び」

ラグリアス「これでパーティは26個になつたーあと四個あれば京都へひとつ飛びできる！」

ヘレン「あと四個のパーティってなんなんだよ？」

ラグリアス「サラマンダー・コンロ、ノームドリガー、ウンディーネポンプ、シルフファンネルの四つだ」

ヘレン「うひひやー！ボスキャラみてーな名前のパーティなんだなー！」

ラグリアス「サラマンダー・コンロは周囲の敵を瞬時に焼毒し、ノー

ムドリガーハドリルで地面に大きな地割れや地響きを起こし、ウンディーネポンプは放出する水圧弾で地上の存在をも溺死させ、シルフファンネルは敵を地平線の彼方まで吹き飛ばすほどの風を巻き起こす

クレア「おい、ノームドリガーツ、あいつが使ってる奴か?」

ラグリアスはクレアの指差すほうを見た! ラグリアスは恐るべきものを目の当たりにした!

野獣「イグイグイグイグイグ、ンアツー!」

なんと見ず知らずの野獣がアツー! に使っていたのだ! ! ! !

ヘレン「おえ―――つ! ! ! (吐)

ラグリアス「てんめえ―――! ! ! き・・・汚ねえだろ! ! !

ラグリアスはエネルギー弾で野獣を吹き飛ばした!

野獣「ンギモヂイ~」

ラグリアス「全く・・・。くそみそだよ、これ・・・」

ヘレン「あたし全力で泣いていい? (半泣き)

ラグリアス「あと三つ・・・。どうする?」

すると、またクレアが言い出した!

クレア「ウンデイー・ネポンプって、あいつが使つてゐる奴か？」

ラグリアスはクレアの指差す方向を見てみた！すると、全裸のレイ・チャエルがウンデイー・ネポンプから噴出される水圧弾をシャワーみたいに浴びていた！

レイ・チャエル「ああ！」のシャワーを浴びていると、明日も「ゴルフで頑張ろうって気になる！！！」

ラグリアス「歪みねえんだよ！貴様の筋肉は！－！」

ラグリアスはエネルギー弾でレイ・チャエルを吹き飛ばすと、ウンデイ・ネポンプを取り返した！

ヘレン「筋肉といえばいたな！そのパートと同じ名前のウンデイー・ネットという奴が・・・」

ラグリアス「ふーん・・・」

ラグリアスが何気に話を受け流すと、またクレアがつべこべ言つてきた！

クレア「ラグリアス！シルフファンネルはあいつが持つてゐるぞ！」

ラグリアスはクレアの指差す方向を見た！すると、恐ろしいものを見てしまった！

ダフ「えへへへ・・・・。ぶーぶー」

なんと、ダフの尻から生物学上ありえない風力で屁が出ていたのだ

…さうに、その屁はすつきりとしたマントの匂いだった！

ヘレン「へつ」き嫁さんみてえ・・・」

ラグリアス「あの、ゴミクズが！！！」

ラグリアスはダフの背中から内臓ごとシルフファンネルを引っこ抜いた！！！

リフルーダフうううう！（涙）

リバ川は絶叫しながら泣き叫んだ！

ノイズの発生とその抑制

卷之二

「ラグリアス、俺が悪魔……？ 違う……。俺は妖魔皇帝だ！！ ガハハハハハ！ アハハハハハ！！ 覚醒者がゴミのようだ！！ ギヤハハハハハ！！！」

リフル「許さない！！牙突零式！！！」

ラグリアス一ならばこゝちは玉タツ零式!!!!」

ラグリアスはそういうと、リフルの体をバテバテに碎いた！

リフル「ぐうう・・・・」

「うじけなくなつたりフルを、ラグリアスは食べだした！！

ラグリアス「いたきまわす！・・・ああぐー！モグモグ、クチャ  
クチャ、ガツガツ、ムシャムシャ・・・。ふはーつーうまかつた！  
！ごちそうさま」

ラグリアスは腹一杯になつた！

クレア「お前、リフルを食べちゃうくらい強かつたんだ・・・」

ヘレン「まさに妖魔皇帝……！」

ラグリアス「さてと・・・。残るはサラマンダー・コンロだけか・・・

ラグリアスはブラブラ歩きだした！すると知らないおじさんが寝転  
がつていた！

金子「グーグー」

ラグリアス「ここで寝てると、風邪ひくぞー」

ラグリアスは優しくも厳しい口調で警告した！よくみると、そのお  
っさんは腹の上にガスコンロのようなものを置いていた！

ラグリアス「これは・・・サラマンダー・コンロ！」

ラグリアスはそう叫ぶと、サラマンダーコンロをおっさんから取り  
上げた！すると寝ていたはずのおっさんが突然絶叫した！

金子「くそつたれええええつ！……グーグー」

ラグリアス「驚かせやがつて！」

ラグリアスはそういうながら、戦闘機の元へと戻った！そして四種の神器を翼の部分に取り付けると、出発の準備をしだした！

ラグリアス「これで京都へ行ける！なんか買つてきてほしいお土産あるか？」

ヘレン「ズズメの丸焼きとか、ハツ橋とか……。皿いものならなんでも！」

クレア「ラキを探してきてくれ！」

ラグリアス「ラッキーの卵が欲しいのか、うんうん……」

クレア「？？（。）？？」

ラグリアスはなんだかんだ言つと、戦闘機に乗つて行つてしまつた！

ヘレン「組織をぶつぶしたら、次はラグリアスを殺るのか？」

クレア「……何やら京都で恐ろしいことが起きそうな気がする……特に四種の神器……あの兵器からとてつもなくまがまがしい“何か”を感じた」

ヘレン「おーい、聞いてる？」

クレアの感じた不吉な予感、四種の神器のまがまがしい何か・・・。  
一体、この先、どうなつてしまふのだろうか？

## 好きなものだけ食べていきたい（後書き）

実は「ヘルクライト7・8柱」のPV・10000越え達成記念だつたりする。

もしかすると、クレアの中の人ネタだつたりするかもよ？？

## ラグリアスの無闇なる挑戦（前書き）

久しぶりの投稿になるな。話が進むにつれて前半の内容が薄くなり、手抜きに・・・あのキャラの意外な断末魔が！？

## ラグリアスの無闇なる挑戦

ある日、ラグリアスは作者のマンネリ化にいらだっていた！

ラグリアス「あの・・・。私、いつまで戦闘機に乗つていないとならないのだ？」

ナレーター「ラ帝にミサイルをぶち込むから、待つていろだつてさ」

ラグリアス「ラ帝ってなんぞ？」

ナレーター「神聖ラグリー帝国の略称だお（ ^ ^ ^ ）」

ラグリアス「おい、ちょっと待て！一体誰が我が家にミサイルを！？田にちは？？」

ナレーター「どうやら妖怪の仕業らしい。田にちはスパイを使ってください」

ラグリアス「いかん！私は国を守らねばならん！！！国を守ることが皇帝としての指名！だから帰る！！！」

ラグリアスはそういうと、神聖ラグリー帝国へと帰還した！

ナレーター「これで・・・よかつたのか！？」

浅井クリープス「そう、それでいい」

なんと、浅井はクリープスという黒い妖怪と化していた！

浅井クリープス「ふふふー私は海苔みたいな黒い手になつたぞーーー！  
ーどうだ？うひやましいだろーー！」

ナレーター「関係ない話はいいでしょ！」

浅井クリープス「なん・・・だと・・・！？」

ナレーターと浅井クリープスが押し問答をしているが、ラグリアスは自宅へと帰っていた！

ラグリアス「むしゃくしゃして帰つてきたが・・・後悔はしていい！  
い！」

ラグリアスはそういいながらラグリー城へと舞い戻つた。しかし、  
だれもいなかつた！

ラグリアス「おいーなんでいないんだよー？自宅警備員すらいない  
のかーー？」

ラグリアスがそう叫んでいると、床に手紙が置いてあつた！

ラグリアス「手紙・・・なになに、『ラグリアスが帰つてくるま  
でキヤバクラで遊びほうけようー』・・・帰つてきたぞ、おいーー！  
私は帰つてきたぞーー！早くスペイを雇わないと、ミサイル喰らひが  
ーーー！」

ラグリアスが嘆いていると、100メートル先に妙な本があること  
に気づいた！

ラグリアス「なんだこれは？」

ラグリアスは本を手にすると、適当に読み始めた！

ラグリアス「なに？トン、トンカラ、トンカラトン？？」

ラグリアスが本の内容を適当に言つていると、日本刀を持ったミイラが現れた！

トンカラトン「てめえ！俺の名を言つてみろーー！」

トンカラトンはそう叫ぶと、ラグリアスに斬りかかった！ラグリアスはすかさず持っていた剣で攻撃を防いだ！

ラグリアス「なんなんだ、この邪悪なエネルギーはーーー？？？」

トンカラトン「くくく！我が攻撃を喰らつた者はトンカラトンになるのだーーー！」

ラグリアス「心の声・何を言つてているんだ、このつはー？自分が強いとでも思つてゐのか！？！？」

ラグリアスはそう思いながらも、トンカラトンの日本刀を弾き飛ばした！

トンカラトン「やべっ・・・・！」

ラグリアス「終わったなー碎け散れ！波動玉砕砲！ーー！」

ラグリアスはそういうと、手から巨大なビームを放つた！トンカラ

トンは消滅した！

ラグリアス「ダメだ・・・。戦国“薦怪獣”やつていたからスランプになつちまつたのかな？」

ラグリアスはあまりの展開のくそつぶりに血べどを吐きながらマフソンしたくなつた！もしも可愛い幼女が自分の娘だったらとか考えたりもした！が、あーだこーだしても先へ進まないので、またさつきの本を読んだ！

ラグリアス「さつちやんはね、サチコつていうんだ、ホントはね・・・」

ラグリアスが歌詞を読んでいると、鎌を持った幼女が現れた！

さつちやん「貴様の手足、切り刻んでやる・・・」

ラグリアス「なんだ貴様はー・・さつちやんなのか・・・・」

さつちやん「バナナをくれれば助けてやるー・・・」

ラグリアス「ならば、我が頭から生えている巨大な角でも喰らうがいい！」

さつちやん「ならば、遠慮なくいただくー・・・」

さつちやんはそう叫ぶと、ラグリアスの頭の角をバリバリと食べだした！

ラグリアス「ふざけるな、おいーー！私の高貴な角を食い過ぎだよ

！」

さつちゃん「アテンション・バナン」

ラグリアスはバナンという言葉を聞いて愕然とした。バナンとはラグリアスから追放したはずの妖魔だった！

ラグリアス「あいつ、大妖魔を蘇らせようとしていたからな・・・。それも妖魔と化した遠藤家をな・・・」

ラグリアスがつぶやいているにも関わらず、さつちゃんはラグリアスの角を全て食べていた！

ラグリアス「貴様、私の兜の角をキレイに喰うとはどういうことだ！？」

さつちゃん「腹一杯になったから、お前の手足をちょん切つてやるよー！」

ラグリアス「黙れ小僧！！貴様はおとなしく死んでいればよかつたんだ！！」

ラグリアスはそういうと、さつちゃんを地面にたたき付けた！

さつちゃん「ぐふつー！」

ラグリアス「朽ち果てるー！雷光魔人弾ーーー！」

ラグリアスは両手から強大なエネルギー弾を放った！

さつちやん「ぐがきやああああ……！」

さつちやんは跡形もなく消し飛んだ！城も大破してしまった……！  
ラグリアス「全く……。何だったんだよ、さつきのサチコロXは  
！？」

ラグリアスは愚痴をこぼしながらも、本を読み進めた！

ラグリアス「大妖魔トクージに気をつける！奴は酒を飲むと攻撃力  
が馬鹿に上がり、防御力が馬鹿に下がるそうだ。今はキオウという  
奴になつているだろ？……」

ラグリアスが読み終えると、大妖魔トクージが現れた！

トクージ「なんだてめえは！？俺を呼び出して何になるんだ？」

ラグリアス「こいつが大妖魔！？何と言つ妖気だ！覚醒者と互角・  
・いや、それ以上か！？！？」

ラグリアスが戸惑つていると、トクージが殴り掛かってきた！

トクージ「オドリヤー……！」

ラグリアス「ふんつ、簡単にはやられんよ……！」

ラグリアスはトクージの拳を受け止めた！すると、とんでもないダメージを受けた！

ラグリアス「な……なんなんだ、このパワーは！？攻撃を防いで

もダメージを受けるとか・・・」

トクージ「何を言つてゐるんだ、てめー!?」

トクージはそう言いつつ、城に置いてあつたウォツカを瓶ごど飲み出した！

ラグリアス「げえつ！アカーン！-！」

アケージー 撃で潰してやるから、なんどじゅねーそーそー！」

トケリシはそこ止ふと  
再び「ケリシ」は殴り掛けた！

國朝詩前言後序

月 沢 一 九 二 月

ラグリアスはそう叫ぶと、トクージを殴りつけた！

トケニシ・ぐおうあかああああああ

トクージは絶叫すると、大爆発した！トクージの爆発は地球の大地を大きく震わせた！

ラグリアス「ぜえぜえ・・・。まつたく、なんなんだあのジジイは

！？しかしジジイながら大妖魔の力、おそるべし！…もはや妖魔はないのだろうか？まあ、妖魔の終末が来る前に女妖魔を娶らねばならんなんあ・・・

ラグリアスが独り言を言つてゐると、あの本が目の前に落ちてきた！ラグリアスは思わず驚いた！

ラグリアス「なんなんだよ、この本は！？読むたびに化け物は出てくるし、爆発に巻き込まれても燃えないし・・・。また読んだら何か出てくるんだろうな。嫌だなあ、読みたくないなあ・・・。でも読みたくなるのが妖魔の性だ！こうなつたら、一番マシな奴を読むか！」

ラグリアスはそう言つと、本のページをペラペラとめぐり、一番マシそうな奴を見つけた！

ラグリアス「これなら大丈夫かな？・・・『私は死んだ。しかし、市を置いて逝くことはできない。私は悲しくなつた。すると、私の魂は海苔みたいに薄つぺらい体になつてしまつた。足はフクロウナギみたいな貧弱なものになり、腕は細長く手の平は大きくなり、全身も真つ黒になつてしまつた。しかし、私はそれでも構わない。大切な市を譲れさえすれば・・・』」

ラグリアスが本の内容を言い終えると、浅井クリープスが現れた！

浅井クリープス「ついに・・・私が出る」とになつたか

ラグリアス「さあ来い！お前を浄化してやる！…そして無間地獄へぶち込んでやる！…！」

浅井クリープス「お前が今まで読んでいた本……。あれはお前を倒すために科学者に作らせた召喚本だったのだ！しかし、こうなつたからには私直々にお前を倒して、市を助け出してやる！」

ラグリアス「何を言つてゐるんだ！？お市なんてやつ、人質にもしていなければ誘拐もしていないんだけど！？」

浅井クリープス「黙れ！お前は多くの者達を……！」

ラグリアス「うるさい！！！確かに妖魔や覚醒者のエネルギーを取り入れたりはしたが、お市なんか吸収した覚えはない！」

と、その時！突然バナンが自重という言葉を知らないかのような顔をしながら乱入してきた！

バナン「いやいや、なんだか調整していた魔人どもがどこかへ行つてしまつと思つたら、あなたがその本で呼び出していたんですね！」

ラグリアス「バナン！てんめえ————！」

バナン「まあまあ、そんなに怒りなさんなつて！」

ラグリアス「この海苔みたいな奴が、私を嫁泥棒呼ばわりするんだけど！」

バナン「あれ？私に対する怒りではなく、そちらさんに対する怒り？」

ラグリアス「うん！そだよー！」

バナン「そうですか。ならば、その方がなぜ怒っているか、お市がなんのか教えて差し上げましょつか？」

ラグリアス「速く教えろ！私は戦闘機を駆使して日本のコンベーハ行き、工口本を・・・じゃなくて、仲間を助けに行かねばならないんだからな！」

バナン「そうですか。それはどうでもいいとして、秘密を知りたければ条件がありますな」

ラグリアス「うでもいい・・・だと！？」

バナン「今から行う勝ち抜きバトルを制してもらいうか、3億ルーブル払つてもらうかですね。まあ、私的には後者のほうが最も樂でいいと思いますがね」

ラグリアス「ぶつ！ふざけんなよ！！！3億ルーブルつて、我が帝国にある資金の半分じゃないか！そんなの聞いたらどう考へても前者を選ぶ！！！！！」

バナン「いいんですか、それで？もしもそれをクリア出来なかつたら、あなたの工口本は全部もらいます。確か女子高生モノが多かつた気が・・・いつかヘルクライム7・8柱の女子高生達を喰うつもりじやないでしょうね？」

ゾード武田「全部喰つちまつた」

ラグリアス「今一瞬、何か出てこなかつたか？・・・しかし、女子高生は私の命だ！私から女子高生を奪うのは・・・やめてくれえ！」

「バナ...ン「ボヤッキ...みたいですね...。まあ、いいでしょ...う!」で  
は勝ち抜きバトル、レツツ・カモ——ン!——!」

ラブリードの勝ち抜きゲームが、ついに

ラグリアス「さあ、来い！今の私は何でもK.I.L.L.！－！」

「では、まず手始めにリグとお頭でも呼びますか」

バナはリグとお頭を呼び出した！

お頭「斬首の傷は・・・ラグリアス。キ・サ・マ・ニ・ふさわしい  
——つ——!（レベル100）

リグ「お頭！奴に地獄を与えてやつてくれ！」（命令口調）

ラグリアス「ぶつ！お頭の様子がおかしいぞ！？」

「お頭とリグは人間だから、改造してレベル100にしまし

お頭「半兵衛様、武器をパクつて申し訳」『わいません！』

お頭はそういうなり、隼の剣では斬りかかつてきた！

ラグリアス「ううあーーー無茶すんなーーー」

「博士」「ハピコーターが弾き出したデータによると、お頭は三成状態ですじや」「

リグ「ネタバレ野郎は消えうお————！」

リグはタ「博士を叩き潰した！」

タ「博士」「うわへへ・・・・アツー！（死」

ラグリアス「てめえ！——いい加減にしろ！」

お頭「貴様のその目、許さない！死んでもアイシラを守るうとす  
る田だ！！！」

ラグリアス「アイシラって誰！？」

リグ「貴様はそれが何なのかを知らずに死ぬのを！」

リグがそういつた瞬間、ラグリアスはリグの首を掴んだ！

リグ「なんだこの手は！？俺の親父は俳優なんだ！『こんなことして  
許されると思つてるのか！？』

ラグリアス「この手を離してほしかつたら、アイシラが誰なのかを  
話せ。嫌なら・・・腕一本だ」

リグ「わ、わかつた！俺、死にたくない！から教えてやる……！」

お頭「ネタバレは許さない！？」

お頭はそう叫ぶと、リグの心臓を貫いた！

リグ「ぐつ・・・・」お頭様、俺に・・・テレサのぱふぱふを〜〜〜！」

リグはそういふと、爆発した！

ラグリアス「うわへへ〜〜（手の中でリグが爆発した驚き）  
お頭「よくも俺の仲間を！ラグリアス・・・ラグリアス・・・・・ラグリアス〜〜〜！」

ラグリアス「だから何なんだお前は！自分で仲間を殺しておいて」

お頭「バナン〜〜〜」お様とアレを〜〜

リフル「ああ、あたしが呼んでくるわ」

ラグリアス「あれ？お前は確か私が喰つたはず？」

リフル「アンタが寝てる間に口から出てきたのよ〜〜アンタにはいろいろと貸しがあるからね。フフフフ・・・・」

ラグリアス「〜〜また喰つまで〜〜」

お頭「よそ見をするな！いえや〜〜〜ラグリアス〜〜〜！」

ラグリアス「いま、違つ名前言つたよな！？な？」

お頭「俺は今、別キャラのアフレ」をしてるからその癖があつて・・・つ〜つ〜・・・」

ラグリアス「じゃ、あの剣幕はハツタリか」

ラグリアスはそう言つと、お頭を切り裂いた！

お頭「あ・・・あれ？（死」

バナン「お頭・・・。実力は確かなんだが、お頭なだけに頭が・・・（苦」

お頭が死んだ後、こころ様とジャージーデビルが現れた！

こころ様「うひひ！心が欲しいか？」

ジャージーデビル「ヒヒーン！」

ラグリアス「アレってジャージーデビルのことか。ゲリュオンだつたら負けてたかも」

バナン「ゲリュオン・・・。たしか、あのゲームにも女子高生みたいな奴が・・・」

こころ様「心が欲しいか？性欲が欲しいか？金欲が欲しいか？物欲が欲しいか？」

ラグリアス「キモいんだよ！この豚野郎！-！」

ラグリアスはこころ様を切り裂いた！しかし、刃はこころ様の体脂肪の前には無意味だつた！

ラグリアス「奴の体・・・切り裂けない・・・だと-？」

「ここの様「デヘヘ！俺様の脂肪は刃を遠さねえんだ！」

ジャージーテビル「ヒヒーン！」

バナン「これはラグリアス、いきなりピンチーつてかジャージーテビル、『ヒヒーン！』ばかり言つてないで奴を攻撃しろよー・パトリシアか！？」

「ここの様「グヒヒーしねしね！」

「ここの様はそういうと、馬鹿でかい手でラグリアスを殴りつけた！」

ラグリアス「ぐおうあ————！」

ラグリアスはぶつ倒れた！

ラグリアス「くつ・・・金なんて・・・払いたくねえよ！」

ラグリアスがそう思つていると、心の中に惨殺されたとされるロシア皇帝の娘達が現れた！

オリガ「頑張れ頑張れ出来るつてーそこで諦めちゃダメだつて！」

アナスタシア「うるさい姉ですみませんねラグリアスさん。私は、あなたに国を捨ててもお逃げになつてほしい。あの者達が狙つているものは、あなた様の命なのですから」

家康「忠勝、ボルシュビキはやべえ。人の心を捨て、妖魔になつてまでお前を狙つてるみてえだ。だからそんなことにならないよう、こ

わしはとある場所で引きこもつておる

ラグリアス「可愛い娘が出たと思ひきや・・・。家康・・・家康ウ  
ウウウ――――――」

ラグリアスは大声で叫んだ！魂を揺さぶるかのよつこ――！――

「こころ様「なんだ、てめ？」

ラグリアス「貴様、私に『なんだ、てめ？』つて、言えた義理か――――？」

ラグリアスはそうこうなり、こころ様の腹を蹴りまくつた――すると、こころ様のお腹がめちゃくちゃへこんだ！

「こころ様「どわあ――に、肉があ・・・！？」

ラグリアス「喰らえ！魔人雷撃！――！」

ラグリアスはこころ様の腹に向かつて電撃を放つた！

「こころ様「で・・・でじゃぶ！――（死」

ジャージー「デビル「ヒヒーン！」

ラグリアス「ニンジンやるから仲間になつてくれ」

ジャージー「デビル「ヒヒーン！」

ジャージーテビルは仲間になつた！

バナン「お頭、あなたの馬は裏切りました・・・。お頭が力を持って余した結果ですな！」

ラグリアス「おらあ！次はなんだ！？」

バナン「こんどはあの二人組でも呼ぶか！」

バナンはオードリーとレイチャエルを呼び出した！

オードリー「あなたはオモラシのオードリーと春田のいるオードリーのどちらを選びますか？」

レイチャエル「なんで今まで俺を出さなかつたんだ！？」

ラグリアス「うつわ～。もうクレイモアシリーズかいな！」

レイチャエル「お前みたいなイカれた野郎は俺が殴り殺す！」

オードリー「さあ、来い！」これがお前の死に場所だ！」

ラグリアス「雑魚でしょ、あんたらwww」

レイチャエル「ナメんな！－！」

レイチャエルは力の限りにラグリアスを切り付けた！しかし、ラグリアスはことごとく攻撃を粉碎した！

レイチャエル「ぐつ！」

オードリー「何やつてんのよー！」のノータリン、穀漬し、筋肉脳、  
「ゴコラ！」

レイチャエル「・・・ひどい！」

レイチャエルは相方に馬鹿にされてメソメソと泣きながら帰つてしまつた！

オードリー「私つて一人だけじゃ口クに戦えないオモラシガールじやないのよ・・・（涙）

ラグリアス「死ぬか？」

オードリー「『めんなさい』・・・『めんなさい』！」

オードリーは血と汗と涙と小便を垂らしながら逃げていつた！

ラグリアス「さすがに・・・。弱体化しそうってレベルじゃない。  
特にオードリーの扱いがムカシ！」

バナン「あんな小物、生きていても価値ないし」

ラグリアス「おいーそんな言い方はないだろーーコマよつはマシだ  
ろーコマよつはーー！」

コマ「・・・」

バナン「ラグリアスは優しいんですね。あんなゴシくて結婚できな

「い団太い乙女にウルトラファイティングスペシャル情けを賭けるとはね！」

「ラグリアス「ただし」テュートリヒヤミマータにはその情けの100倍の情けをかけてやる！」

「バナン「ラグリアス様は、女子高生好きだし、ロリペドだし……救いようがありませんな。私は熟女ペドだけど」

「ラグリアス「『ちちや』『ちちや』言つてねえで、敵を出しゃがれ！」

「バナン「ならば新参組の髪型へんてこ女でも呼ぶか……」

「バナンはニーナヒルネを呼び出した！」

「ラグリアス「ニーナ……すっかり忘れてたわ」

「ニーナ「てめえ、子供じやねえな？」

「ルネ「……もはや私の手に負える状況ではないな……。逃げるんだ！勝てる訳がないよ！」

「ラグリアス「おい。クズが本氣で、まだ強い方がヘタれてるつてどういうことなの……？」

「バナン「知りませんな。にしても、ニーナのアホ毛ヒルネの垂れ目と唇がコマに似てるんですが……。まさか、コマさんパクりました？」

「コマ「私がパクられただけだし」

バナン「別に褒めてないよwww」

スマ「（ ； ； ； ）」

ラグリアス「早くダフを出しやがれ！あいつ位しかいねえよ、私と張り合える奴は！」

イースレイ「（ ； ； ； ）」

リガルド「（ ； ； ； ）」

ラグリアス「リガルド？リカルドじゃなかつたつけ？？」

その時！突然二ーナが影追いで迫つてきた！

二ーナ「死ねオラア！」

ラグリアス「たしか奴は相手の妖氣をたどり、息の根を止めるまで止まらないというチート技の使い手！これはどうしたらいいんだ？」

バナン「大気圏まで上昇して、地面へ突進するときに奴を巻き込めばいいんじゃね？」

ラグリアス「サンキュー・バナン」

ラグリアスはそういうと、大気圏へ一気に突入した！二ーナも後を追うが、空気が薄くて苦戦した！

二ーナ「苦しいつ！」

そんなことを言つてゐると、ラグリアスが突進してきた！

ラグリアス「これで！最後だあああああつつー！」

ラグリアスは地面への着地に二一ナを巻き込んだ！

二一ナ「体が!!燃える!熱いつ!!焼けるう――――――――!」

二一ナは絶叫しながら燃え尽きた！そしてラグリアスはヘタレているルネの尻に向かつて着地した！

ルネは潰れた！というか、神聖ラグリー帝国の領土が吹っ飛んだ！

ラグリアス「倒したぞ！ 次出せ！！」

「あなたが着地したときに、岩石が何百個もぶつかったんで  
すけど……（怒）

ラグリアス「そう邪険になるなよ・・・」

ヘレン「ふつ、妖魔皇帝！おでれえたぞ！おめえ、つええんだな  
ドウ 帰一武田のつづ

ラグリアス「お前、喋り方がおかしいよ」

ブロリー「カツトオオオオオ――――――！」

「ここからは断末魔だけをお楽しみください。」

ヘレン「ち・・・れしょ・・・」

デネヴ「死生に、生あり・・・残念だね」

クレア「ラキ・・・生きろ・・・」

ミリア「私は・・・17歳・・・」

タバサ「死ぬときは・・・隊長の胸の中で・・・」

シンシア「じうなるとは・・・思つてたから・・・」  
家康「コマの死骸に向かつて」忠勝う――――――（泣）

ガラテア「嫌いじゃなかつたぞ、お前のアホ面・・・」

クラリス「ミアータ、お母さん・・・もう駄目・・・」

ミアータ「あなたが殺したのね・・・パパとママとママ（クラリス）  
・・・」

レイチェル「我が・・・新しい・・・国を・・・!――」

オードリー「所詮は組織の捨駒・・・か」

ディートリヒ「私の命つて・・・一体・・・〔心の声・ラグリアス  
つて口リコンじやなかつたの!――」

アリシア「再起・・・不能・・・」

ベス「姉さん……！」（涙）

シド「ちきしじょおおおお……！」

ガード「結局、ガラテアよりチビのまま終わってしまった。拙者、不器用ですから……」

ラキ「クレアは……俺が……」

ヒロからはスーパー過去の者タイム。

ウンティーネ「素のあたしを……見てほしかったなあ……」

ジーン「のび太に……」飯作つてあげないと……」

フローラ「クレアなら……きっと風斬りを……」

ポーテールの人「作者に名前を忘れられ、この死もまた……忘れられるんだろうな……」

ソフィア「今日が落日か……」

ノエル「死体は残さない……そう、決めているんでな」

テレサ「女神よ……私に……慈悲を……！」

イレーネ「私の好きなサッカー賭博ないのか、バーロー……」

オルセ「カーミンって言われたから、死ぬか

ルヴル「ラキ含め、奴隸商人にさらわれた者たちは南の奥地へと消えて行つた・・・彼らの人間としての人生は閉じた。ここから先は悲惨の一語」

リムト「頭の血管を剃刀で切られた。黒い血が出てる。これが私の血の色か・・・。最期に良いことを知つたな・・・」

ここからは覚醒者タイム。

山男「生まれ変わつたら・・・メガスクайдになりてえな・・・」

ソーメン「あんた・・・化け物・・・」

ヒルダ「エルダではない・・・はず。私、ラグリアスのこと・・・好きだつた・・・」

オフィーリア「お兄ちゃん、今そつちを行くだよ・・・」

リガルド「死ぬ前に・・・ミリアの胸を・・・触りたかつた・・・「クレア・ヘレンの胸は触つてる」

アガサ「眉毛がないのは罪か・・・?グフツ!」

イースレイ「死にたくないなあ・・・」

リフル「なんだか・・・眠たくなつてきた・・・」

ダフ「だれものぞまぬけつまつだな・・・」

ルシラファ「・・・」

バナン「手抜き+」こんなにクレイモアキャラを屠つてビジツするつもりですか?」

ラグリアス「夕飯のおかずにしたらどうだ?「小学生→女子高生枠」  
」

バナン「そいや、まだ倒してない奴いるんじゃね?」

ラグリアス「いたか?」

バナン「・・・プリシラ」

ラグリアス「そいつは確か、異次元へ追放したから大丈夫」

バナン「プリシラなら異次元くらい簡単に破壊できるんじゃね?」

ラグリアス「はは・・・まさかな・・・」

バナン「そうそう!ラグリアスに渡しておくものがあつたんだ!!--」

ラグリアス「最初から言えよ!」

バナン「ダークラからの手紙だ」

ラグリアスはバナンからダークラの手紙を受け取った!内容は「オメガに壮大なイタズラをしたいから、オメガの目の前で俺を殴れ。そのあとは、もっと面白い事になるだろう」と、いうものだつた。手紙を読み終えたラグリアスは静かに戦闘機に乗つた!

バナン「戦闘機に乗るということは・・・行くんですね??」

ラグリアス「何がしたいんだろうな、あいつ・・・」

ラグリアスはしぶしぶダークラのイタズラに協力することにした。  
そのイタズラが全世界を揺るがす事態を引き起こすとは知らずに・・・

## ラグリアスの無間なる挑戦（後書き）

作っているうちに一萬文字を超えていた。一昔前に作った6000字耐久レースが夢のようだ・・・。このあとのは、あれに繋がっている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6587h/>

---

幻魔と妖魔

2010年10月12日14時05分発行